

青藏高原のヤク飼養文化

張 存徳[※]

はじめに

牧畜は狩猟・採集や農耕とともに、人類が依存してきた産業経済のひとつである。それを簡単に定義するならば、動物の群れを管理し、その増殖を手伝い、その乳や肉を直接・間接に利用する生業ということになる⁽¹⁾。

地球上のいろいろな地域に、今でも遊牧民といわれるさまざまな民族が生きている。このような民族の労働人口の大部分が家畜飼養に従事し、社会の存立がそれらの家畜、あるいはその生産物に完全に依存している。しかし、地域によって、家畜化された動物は一致しない。その地域の気候・植生といったような環境条件が狩猟動物の分布をかなりの程度支配しているので、動物の家畜化への自然条件の重要性を示すのである。また、動物の家畜化をいちじるしく促進し、人類の経済生活も安定していられるように、これらの動物の生態が狩猟採集民の季節移動的な生活様式にもよく調和し、彼らは獲物の量の周期的変動に直面して食料資源の安定化を計ったことが、植物栽培、動物家畜化の出発点であった⁽²⁾。

家畜化した動物の中では普通の家牛は、いたるところに分布しているが、この家畜といえどもその体質のため人類の移動にあまぬく従うことはできなかった。そして寒気が肌をつんざく北極圏内では、家犬以外には普通の家畜はもちろん家牛も生活することはできない。そこでこの地方に進出した人類は、そうした家畜をもつことができなかったので、まず犬を、ついで馴鹿（トナカイ）を順化させたのである。しかし、南方の暑熱と烈しい湿気の多い地方も、家牛の生存にとっては適当な地域ではない。すなわち、かかる地域は牛が病気に最も多く罹りやすいところであって、おそらく人類は、最初この地方へ普通の家牛を伴って移動したのであるが、やがてこの家畜がこの地方には不適當であることを認識した結果、湿地においてとくに有力に能力を発揮する水牛を家畜として選ぶにいたった。

これと同様に、非常に乾燥、低酸素、厳寒の高山高原地方においても、普通の家畜、たとえば、馬、豚ならびに普通の家牛もその生存を維持することができない。したがってこの地方で生活している人間は、普通の家牛のかわりのものを選ばなければならなかった。その場合に選ばれたのが青藏高原のヤクである。しかし、ヤギやトナカイなどの遊牧の研究に比べ、ヤクの遊牧の研究はあまり行われていない。ヤクの分布特徴から見れば、世界のヤクは青藏高原を中心として生息している⁽³⁾。青藏高原は世界のヤクの発生地であり、世界のヤクの主要な生産地でもある。この地方はヤクの数量が最も多い。このために、本稿では青藏高原のヤクについて考察することと

※愛知大学大学院文学研究科

する。

ヤクは、ウシ科ウシ属ヤク亜属の動物である。野生のものと家畜化したものがある。野生のヤクは青藏高原内部から祁連山脈青海湖周辺に棲み、その分布が青藏高原に限定された特産種で、青藏高原耐寒動物群を代表する動物である⁽⁴⁾。高度にともなう低酸素は、大概の動物にとって、繁殖や成長に重大な影響を与えるが、ヤクはその高度に適応した大動物である。ヤクは体長二メートル、背高一・六メートル、体重一トンに達するものもあり、全身が長毛で覆われ、特に腹部の黒褐色の毛は数十センチの長さとなって、厳寒の地に耐えることができる。青藏高原のチベット族はこの野生のヤクを家畜化して、役畜をはじめ、乳・肉・毛・絨(じゅう)・皮などの多用の家畜として飼養している。当地住民の衣食住の大半は家畜によっている。糞は高原の重要な燃料となるほか、ヤクは物質の運搬にはなくてはならない重要な交通・運輸手段である。ヤクを「高原の舟」にたとえるゆえんである。青藏高原の「もう一つのシルクロード」において、東西文化交流中に重要な役割を果たしたのではないかと想像している。ヤクは基本資源として、単に青藏高原牧畜民の物質文化に必要なものすべてを満たしたばかりではなく、牧畜民の精神文化にも重大な影響を与えた。飼養ヤクを基盤とする牧畜はさまざまな形式で青藏高原文化の特色を示している。

本稿では、青藏高原の遊牧民・農耕定住民・半農半牧民という三つの層が重なる伝統的チベット社会の中の、基層文化を保持した遊牧社会の基本的家畜であったヤクに視点をあてて追究したい。また青藏高原の自然環境について生態学的、生物学的観点、自然科学的側面から、そしてその発生から進化、生息分布、ヤクの長い家畜化の過程における群れの管理、生殖管理について、また、生産管理を通じて、チベット族がしだいに家畜を食糧として、また経済的・文化的な意図のもとに人為的に淘汰をくりかえし、今日の牧畜社会を形成してきたことについて論証を試みたい。世界と中国のヤク分布の特徴にも言及したい。

ヤクという動物ともっとも深いかわりを持ったチベットの、人間と動物との文化的対応と諸相を、青藏高原の内側からの視点で探ろうと心掛けたい。具体的にはヤクの民俗現象の分析を主にして、現地人、東・西洋人の旅行記、探検記、民族誌、さらに筆者自身の青藏高原での生活体験とつぎ合わせて追究したい。

ヤクを中心として他の家畜との重層構造を多層的に展開できることも牧畜文化の深層を探る上では重要なポイントだと思う。本文の中では、ヤクと他の家畜、動物についての比較を試みるのも、こうした構造化を探り得るとみたからに他ならない。

そのためには、彼らが依存している家畜の動物的特徴や起源にまでさかのぼって栽培植物とのかわりでは見いだすことのできない家畜と人間の諸関係、そして周囲の外的世界とのかわりのなかでつちかわれてきた牧畜社会の特徴を共時的にも通時的にも把握していかなければならない。

一 ヤクの世界的な分布とその特徴

人類の飼養家畜の中で、もっとも一般的な馬は牧草の豊富な地区に飼養されている。一方、ラクダやヤギは乾燥地区である。ヤクの世界の分布地区の特徴から見れば、中国を含め、ヤクはおもに高海拔、低気圧、低酸素、牧草欠乏の厳しい高寒高山の草原に分布している。青藏高原の羌塘（チャンタン）地区はヤクの発生地である。羌塘地区はチベット自治区の北部、カイラス山脈、クンルン山脈およびタングラ山脈の間にある。青藏高原は世界のヤクの主要な生産地であり、ヤクの数量が最多である。世界のヤクの九〇％は青藏高原の一四〇万平方キロメートルの高山草原に分布している。中国には各種のウシが七一三万四千頭いる。そのうちヤクは一三〇〇万頭いる。世界には各種のウシが十三億四千六百万頭いる。そのうちヤクが一四〇〇万頭であり、世界のウシの総数の一％を占めている。ほかに一〇〇万頭はモンゴル、ロシア、ネパール、インド、ブータン、シッキム、アフガニスタン、パキスタンなどに分布している。

モンゴルは世界で二番目にヤクが多い。ヤクは七〇万九千五百頭あり、世界のヤクの総数の五％を占めている。ロシアはヤクが十三万六千頭あり、世界のヤクの総数の一％ほどを占めている。ネパールは九万頭、世界総数の〇・六％あり、インドは二万五千頭あり、世界総数の〇・二％ある。ブータン、シッキム、アフガニスタン、パキスタンなどの国家に数少ないヤクが分布している⁽⁵⁾。

インドは国民の八三・五％の人々はヒンズー教徒で、普通牛は殺さない、食べないだけではなく、それを神牛として敬慕する。老齢の牛とか病気の牛であっても野外に放して自由にさせておく、自生し自滅するにまかせる。このような老齢と病気の牛が街道をひよろひよろ歩いてくると、ひざまずいて祈禱する人々もいる。ある地方では神牛に「養老院」を造って、神牛に安らかに晩年の日を送らせ、絶対に傷をつけない。しかしながら、ヤクと水牛については神牛と思わず、殺したり食べたりすることができる。だから、インド国民の牛肉食品は主としてヤクと水牛から供給される。ヤクと水牛はインドの人々の経済生活の中に重要な役割を果たしている。

ヤクの世界の分布状況によると、ヤクは青藏高原を中心として、ヒマラヤ、パミール、コンロン山、天山、アルタイ山などの大山脈の内外に延びている高山高原地区に展開してきた。青藏高原は世界のヤクの分布の中心であり、ヤクの九〇％、約一三〇〇万頭以上のヤクはこの地区に広く分布している。ヤクの数量から言えば、この地区が最も多い。

ヤクは寒さに耐えるが、暑さには耐えられない動物である。そして、古代ヤクと現代ヤクの分布の特徴は高山高寒、低温低熱の生態環境と離れない。ヤクの分布の変化は、自然要素すなわち気温令熱の変遷および部族、民族遷移の人為要素の影響を受けた。

気温は緯度がしだいに増えることと海拔の高度が次第に減ることによって制約されている。平均気温の比較から見れば、平均緯度は北へ一度増すと、気温は〇・五五度減ずる。海拔高度が一〇〇メートルごとに上昇すると、気温は〇・六度減ずる。中国の研究者の報告により、ヤクの最適の生態条件は暖季の月平均気温が五～一三度、極端最高気温<27℃、年降雨量>250mm、冷季の最冷月の平均気温>-12℃、極端最低>-36℃である。可適応の気候生態条件は、暖季の月

平均気温は一九度ほど、極端最高気温<32℃以下、年降雨量>150mm、湿潤系数は〇.七である⁽⁶⁾。

ヤクの分布は低緯度、海拔高度三〇〇〇メートル以上、高緯度、海拔高度二〇〇〇メートル以上の西北の阿爾泰山（アルタイ）、西部の天山、崑崙山、阿爾金山（アルキン）、祁連山（キレン）西南部のヒマラヤ山などの大山山脈および周囲の高原高山地区である。海拔2000メートル以下はほとんど絶無であった。青藏高原の高山高原の低温環境はヤクの最適の生存環境である。

二 青藏高原のヤク牧畜文化の自然基礎

—青藏高原の風土—

(一)

ヤクが飼育されている青藏高原は中国国内でも特殊な地理環境の中にある。青藏高原は中国の西南部に位置し、北界は崑崙山（クンルンサン）、阿爾金山（アルキンサン）、祁連山（キレンサン）、中国の西北地区と接し、東は三〇〇〇メートルの等高線で華北地区、西南地区と接する。西部と南部は国界線でロシア、アフガニスタン・パキスタン、インド、ネパール、チンブー、ミャンマーなどの国家に連なる。行政区画では青海省、西藏自治区全部と、新疆（シンキョウ）自治区の南縁、甘肅省の西南縁辺、四川省の西部と雲南省の西北辺部が含まれる。青海省・西藏（チベット）自治区を主とし、青藏高原地区と称せられる。

青藏高原は崑崙山（クンルン）、阿爾金山（アルキン）、祁連山（キレン）、岷山（ミン）、祁峽山（チュウライ）、横断山、ヒマラヤ山など広大な山脈に囲まれていて、地殻が隆起して形成された。崑崙山（クンルン）—祁連山（キレン）—岷山（ミン）—祁峽山（チュウライ）および横断山（オウタン）などの山脈によって地形界線が形成され、地勢は西北が高く、東南が低い。西北の藏北高原の海拔高度は五〇〇〇メートル以上である。東南部の地勢高度は比較的低いが三五〇〇メートルほどもある。多くの山峰の高度は六〇〇〇～八〇〇〇メートルを越える。その中で八〇〇〇メートルを超えた山峰は十二あり、世界一の高峰チョモランマと第二の高峰チョウガァリは本地区にある。チョモランマはヒマラヤ山脈は中国、ネパールの辺境に、チョウガァリは中国、パキスタンのカラコンロン山脈にある。高原の縁辺は高山に囲まれている。それぞれ四〇〇〇メートル、三〇〇〇メートルと七〇〇〇メートルの差で周囲のタリム盆地、河西回廊、四川盆地、とガンジス川平原などの近隣地区の上に立っている。さらにこのように周囲に対して、高原が高く、険しく切り立っている。

青藏高原には一列の雪峰が連綿と多くの巨大山脈が分布し、氷河、湖沼が多い。黄河、揚子江、メコン、ガンディスなどの東アジア、東南アジアの大河は、ほとんどこの高原から発している。

青藏高原の面積は広く、東西の長さは二七〇〇キロメートル、南北の広さは一四〇〇キロメートルであり、総面積は二五〇万平方キロメートル、中国の総面積の四分の一を占めている。世界では最大の高原の一つ（ブラジル高原は五〇〇万平方キロメートル、海拔は五〇〇～九〇〇メートル）である。

青藏高原の平均海拔高度は四〇〇〇～五〇〇〇メートルである。人間が日常的に生活できる範囲は、海面から気圧がほぼ二分の一になる五三〇〇メートルまでとされている。大気圧は三〇〇〇メートルに達すると、おおよそ三分の一に減少してしまう。

青藏高原の大半の地域は三〇〇〇～五五〇〇メートルの間にあり、この中に三五〇～四〇〇万人程度の人々が住んでいると推定されている。地球上で最も高い地域にたくさんの人が住むところと言えるが、なかでも遊牧民は、生存の限界高度である五三〇〇メートル付近までを自分たちの生活圏にしている人々である。

いずれにしても、青藏高原の高度はその険阻な地形以上に、青藏高原そのものを外から保護し、ときには外部から隔離するという役割を担ってきた。そして厳しいながらも安定した環境が、文化のすぐれた受け皿となり、青藏高原に定着した文化を長期にわたって保護し、かつ独特の文化を熟成させる要因になったと思われる。なかでも、インドからもたらされた仏教はその最たるものであろう。青藏高原の高度とその険阻な地形は、さまざまな意味でチベットの生活や文化の基本に深くかかわっている。

(二)

青藏高原とヤクのかかわりは気候風土と深くかかわっている。青藏高原は北緯二七度二〇分～四〇度の間にあり、気候帯でいうと亜熱帯から暖温帯である。しかし、青藏高原はアジア大陸の内部にあること、三〇〇〇～五五〇〇メートルの高さをもつことによって、冷暖帯から寒帯の気候を示す。乾燥地帯における気温の垂直変化は、一〇〇メートルにつき〇.五度低くなることから、青藏高原は、低地よりも常に一五～二五度程度低くなり、寒冷でかつ乾燥した地帯がつけられる。大気が希薄で水蒸気の少ない高原では、太陽の強烈な輻射熱によって日中の気温は想像以上に高く、夜間は放射冷却によって気温が低下するという、日較差のきわめて大きい温度変化を示すので、一日の中にも、夏の気温と冬の気温を経験することができるほどである。

青藏高原は南から北へと温帯・亜寒帯・寒帯に区分され、また乾燥状態から、東から西へと湿润、半乾燥、乾燥気候区となり、それらの組み合わせから六つの気候区に細分される⁽⁷⁾。ケッペン(W. Köppen)の気候区分では、青藏高原は北極圏や南極圏と同じように、ツンドラ気候および氷雪気候(永久凍結気候)に区分されている⁽⁸⁾。青藏高原の大部分の地域は永久凍土帯であり、地表面は草原状であっても、地下は凍土である。

青藏地区の南部はインド洋のベンガル湾からかなり近い。その他の東、北、西三方面は海洋から遠い。ヒマラヤ山の障壁作用のために海洋は青藏高原内部にあまり影響しない。青藏高原は中低緯度の亜熱帯と暖温帯の位置にあっても、また、中国東部の華中地区、西南地区、華北地区およびヨーロッパの地中海地区の緯度に相当しても、自然景観は上述した地区と大きな差があり、したがって独特な自然区域が形成された。気候は高寒である。自然景観は高山草甸草原と高寒荒漠景観をあらわしている⁽⁹⁾。青藏高原は世界の中低緯度地帯水河、凍土が広範な地域である。

青藏高原は土地が高く、冷涼で、長い冬をもつ。多くの地方は盛夏でも霜雪が絶えない。昼夜

の温度差が大きく、青藏高原全体が高冷な気候区である。夏のモンスーンの影響は少なく、その上、冬の北西モンスーンは多量の降雪をもたらしている。

このように、青藏高原は寒冷乾燥の特有の気候を持ちつつも、ヒマラヤを越えたインドモンスーン気候の影響がのこる地域や、さらに高原の周辺地域（西寧・青海湖・共和付近）の比較的温暖で多少降雨の見られる地域では、農耕が行われており、半農半牧地帯を形成している。その他、青藏高原は、氷河や荒野などで覆われた部分を除くと、草原が広がっている。この広い草原こそ、チベット遊牧民の生活の舞台である。それを可能にしたのは、ヤクの家畜化である。

三 青藏高原独特の家牛としてのヤクとその野生形態

野生のヤクと家畜化されたヤクの相違点は次のようである。ヤク (*Bos mutus*) は、平原に適応した家畜ウシの先祖である原牛 (*Bos primigenius*) から更新世に分化して、高山の草原に適応した。バリウシ・ガヤールの野生原種であるバンテン (*B. javanicus*) ・ガヤール (*B. gaurus*) よりも原牛に近いとされる (THENIUS' 1969)。野生ヤクの分布は西藏 (チベット) 自治区東北部から新疆自治区南部と青海省西南部にかけての高山帯、および甘粛・青海省境の祁連 (キレン) 山脈に限られ、数少ない。ヤクはこの高寒高原に適応したウシ科動物の生物学的特性を示す。チベット語で「ヤー」、中国語で牦牛 (マオニュー) と呼ばれ、青藏高原では単に牛というときヤクを指し、ウシを指す場合は黄牛という。

ヤクは海拔二〇〇〇～五〇〇〇メートルの間で飼われているが、その主要な地域は三二〇〇～四八〇〇メートルの間である。世界のヤクの九〇% (他の一〇〇万頭はソ連・インド・モンゴルなどに飼養される) は青藏高原で飼育されている。現在、中国のヤクは一三〇〇万頭いる。そのうち青海省は四九〇万頭、チベット自治区三九〇万頭、四川省三一〇万頭、甘粛省八七万七千五百頭、新疆自治区一七万頭、雲南省で五万頭である。

ヤクの品種は、青藏高原型 (あるいは高原型、草地型) と横断高山型 (あるいは高山型、谷地型) の二つに大別される。青海省で最も多いのは前者の内の玉樹ヤクであり、四川省では主として後者に属する九龍ヤクが飼われている。

ヤクは哺乳綱偶蹄目ウシ科の一種である。野生のものと家畜化したものがある。野生種は青海省を中心に、四〇〇〇～六一〇〇メートルに及ぶ青藏高原に分布し、家畜はインド北部から中央アジア、中国西部の高地に飼われる。ウシによく似ているが肩が隆起し、肋骨は一对多い一四対である。雄は体長二メートルに達し、肩高が一・六メートルを超えるものもあり、体重は一トンほどだが、雌は小型で、体重は雄の三分の一くらいである。体の下面に長い毛が生え、体色が黒褐色で、角も黒い。高山生で、夏は万年雪のある標高六〇〇〇メートルあたりまで姿をみせる。雌と子は大きな群れをつくるが、雄は単独かあるいは一二頭くらいまでの小群でそれぞれ別々に行動し、種々の草や地衣類を食べる。九月に始まる交尾期には雄は雌をめぐって争う。妊娠期間は約二八〇日ほど、一産は一～二頭で、寿命は三〇年の記録がある。

野生のヤクのもっとも顕著な特徴は、怠惰である。朝と夕方この動物は牧草地に出て行くが、

一日のほとんどの時間は横になったり、ときには立ったままで、何者にも乱されない安逸のなかで過ごす。口をもごもごさせて反芻している動作で生きているのが分かるほどである。その他の点では彫像とまったく同じで、頭さえ何時間もそのままの位置である。

ヤクは概して暖かいのが好きではないので、太陽の光線を避けられる山の北斜面や崖っぷちを寝ぐらに選ぶことが多い。日陰でもこの動物は雪の上に好んで横たわり、雪がないとわざわざ蹄で粘土質の土を掘って、土ぼこりのなかのむき出しの地面の上に横たわる。だが、いちばんよく見かけるのは、牧草地で休んでいるところである。

勇壮な姿をもつヤクは、普通ならば、決して人に危害を加えることはないが、攻撃されれば、よくいわれる「ウシのばか力」を発揮して、必死の戦いを展開する。野生のヤクは、少なくとも一トンの体重があり、全身、黒い毛におおわれ、腹部の毛は地を掃くほどで、体重も体格も家畜化したヤクの倍はある。

東崑崙山脈とアルトゥン山脈との間の谷はだいたい四〇〇〇メートル以上の海拔があり、雪線よりわずかに低く、山腹にも谷間にも一面に青草が生えている。大群のヤクはこのようなところに生息している。

ヤクの腹部の黒褐色の毛は地に触れるほど長く、横になって寝るときに厚い絨毯を敷いたようになって、防寒保温の作用を果たす。四肢は太く、体は頑健で、高地の薄い酸素と寒さによく耐え、急峻な斜面や谷を乗り越えていく能力をもっている。家畜化したヤクより体は大きく、体質や能力もはるかに強いが、このことは家畜化したものの方が退化していることを物語っている。

ヤクの頭に太くて硬い一対の角がある。このような頑丈で鋭い角のために、高原では向かうところ敵なしで、「王者」と称しても過言でなく、凶暴なユキヒョウや貪婪なオオカミといえども避けてとおるのである。それでも、ユキヒョウやオオカミがヤクの子供を捕まえようとすることはよくあることで、このようなとき、ヤクの群は角を外に向けて円陣をつくり、子供をなかに入れて保護し、周囲に目を配って警戒する。もし立ち去ろうとしないユキヒョウやオオカミがいれば、たちどころに角で刺し殺されてしまう。

この一帯で調査活動をしている新疆環境保護庁の顧正勤氏は「ヤクが一頭だけ単独でいたら、絶対に近寄ってはならない。普通、この種のヤクは交尾のときに自分より強い雄に負けてはじき出された独身者であるから、とくに怒りっぽくなっていて、もし触れるものがあれば、死にものぐるいで突っかかってくる。」と。

一九八五年七月二十二日、この地区へ調査に行った新疆環境保護庁の大型自動車がヤクの攻撃を受けた。ヤクは重量五トンのトラックに向かって突撃し、トラックは激しく揺すられたが、鋼鉄製のバンパーは壊れはしなかった。それでも、ヤクはこの「巨体」に恐れるようすもなく、二度三度と攻撃してきた⁽¹⁰⁾。

祁連（キレン）山脈などのように野生ヤクが近くにいたところでは、家畜ヤクの体形を大きくし、かつたくましい性質を導入するために野生ヤクと交配させる。

近年では雌ヤクにイギリス産肉用種のハイランド種を用いて雑種がつくられ、それをヤーコウ


(yakow) と呼び、寒冷地で飼育に適した肉用品種としている。なお、家畜のヤクが増加するにつれて、野生種はきわめて少なくなり、絶滅が心配されている。中国政府はヤクを、パンダと同様に一級野生動物として、保護している。

四 青藏高原におけるヤク馴養の歴史

ヤクは原始的牛種の一種であり、中国の特殊な家畜の一つである。中国ではヤクが馴養された歴史は長い。世界のヤクの発生地は青藏高原である。

家畜ヤクは人類が野生ヤクを狩猟して、だんだんに野生ヤクを馴養して発展してきた。原始ヤクが野生ヤクの祖先であるといえ、野生ヤクは家畜ヤクの始祖であると言える。原始のヤクの牛種が馴養されて時期は普通牛種の馴養時期とだいたい同じで、今から約一万年頃であった⁽¹¹⁾。中国の農業歴史学者任乃強教授の考証によって、ヤクは他の牛種の家畜化と同様に、人類の進化、民族の形成と関連している。ヤクの家畜化が古代羌民族の形成の期間と一致することを指摘している。考古学者は一九五九年に青海省の諾木洪塔里の石器時代の人類社会文化遺跡の中にはヤクの毛で織った毛繩、毛の布、ヤク皮で作った皮靴、陶器ヤクなどの製品を発見していた。殷周時期以前、チベット族の祖先、すなわち古代羌人は青海省西部、南部地区で馴養された家畜のヤクが、今まで崑崙山、祁連山系の地域に存在している。そして、早くからヤクの畜産品を原料として、多くの生活用品や工芸品を作り出した。今から五〇〇〇～一〇〇〇〇年前頃に、青藏高原でヤクを飼養していた。青海省の都蘭（ドラ）の吐蕃王朝の古墓の前面に、数十頭の馬や羊やヤクがナマのまま埋められていた⁽¹²⁾。

また、ヤクにおける古文字の形成から研究してみよう。夏商時代以前に、中国の古代文字学者（伝説により黄帝時代の蒼頡という人物である）は、長期間、ヤクと普通家牛の外部形態、構造の特徴を観察して、この両者を区別するために象形文字をつくった。最古の甲骨文字の中に、普通家牛を「𠂔」、ヤクを「𠂕」と書いて、普通家牛は牽引耕作の労役家畜であること、体大、毛長のヤクにひもを結ぶ必要がなく、放牧する家畜であることを描いている。このように文字造形からもヤクの馴養時期は普通家牛の馴養時期より遅くないと思っている。

チベット語では、ヤクを「ヤー」と称する。外国の文献でヤクの称呼はすべてチベット語のヤクの称呼である。例えば英語はヤクを「y a k」、ロシア語はヤクを「ЯКЧ」と書いて、発音はチベット語の「 (YAK) と非常に近い。日本語の文献にはヤクについての称呼はチベット語の発音により「ヤク」と古漢語の「犍牛」を両方使っている。山口慧海は仏教の原典を求めて、一九〇〇年チベットに入り、日本最初のヒマラヤ踏破者、日本チベット学の始祖としては初めてチベットの家畜であるヤクを記述している。同氏がヤクに乗ったことは旅行記に記載されている。ヤクについて次のように述べている。「犍牛（ヤク）という獣は、まず日本の雄牛よりよほど大きい。また小さな奴は雌牛くらいのももある。少し背が低く、非常に毛深い。またその尾はちょうど絵に描いた獅子の尾のように、太くて房の形になって下がっている。これをチベットでヤクと言っているが、この獣は西洋にもないので翻訳できず、英語でもやはり<ヤク>と言

う。その雌は<リー>と言う。牛のような顔をしているが、目つきの鋭く恐ろしいこととは驚くばかりで、ときどきぎょろりと睨む。はじめはいまにもその鋭い角で突いて来ないかと恐れるくらいに勢いのある獣に見えるが、その性質は案外おとなしく、至極人の役に立つもので、日本の牛よりもなお溫柔である⁽¹³⁾」。

チベット人とナシ人（納西、中国の少数民族）はヤクと黄牛との雑種牛をゾー（dzoo）と称し、中国の経文では「牦牛」と書いた。中国西南地区の住民は昔からヤクを「雅牛」（ヤーニュ）と称している。これもチベット人がヤクの称呼のしきたりまま用いる。古代と近代のヤクの交易センターとしての四川省の雅安（ヤアン）を雅州（ヤシュ）と称する。さらに当地の河川をも「雅河」と称する。してみると、中国のヤクの発展の歴史が長く、影響が深遠であることがわかる。

ヤクの発展歴史が長く、分布地区が広いので、各民族の物質生活と精神生活に大きな影響を与えており、そのために各歴史時期のヤクに対する称呼もすべて一致しない。ただし、チベット文字には相違はなく、すべて「𑄎𑄎𑄎」（雅克）と称呼している。漢文字には歴代の文字学者は遠く辺鄙地区のヤクに対する観察の角度が違うために、造字上にも違う。大体ヤクの体つき（スタイルと容貌）、全身長毛、鳴き声三つの特徴により名字をつくった。もっとも多かったのは、ヤクの全身が長毛でおおわれているという特徴で命名し、造字することである。古代殷周時期の金文はヤクのスタイルと容貌によってヤクを「𑄎𑄎」と書いた。この字はヤクの体が大きい、角が開き、毛が長い、尾が太いなどの特徴によりヤクの輪郭を描き出した。西周・東周・春秋・戦国期には、ヤクの全身におおわれている長毛により命名することが多かった。例えば、『穆天子伝』（ムテンシデン）にはヤクを「豪牛」と称した。『山海経』（サンガイキョウ）には「髦馬、馬の如し、足の四節皆毛有り」。秦漢時代にはヤクを「旄」、「犛」、「犛」と称し、隋唐から元明にいたってはヤクを「犛」、「髦」などと称した。清の乾隆時期には直ちにヤクを「毛牛」と称した人もあった。古文献にも他の称呼が少なくない。清人呉任臣は『山海経』について次のように注釈した。「雅牛は、『広志』には毛犀と謂れ、顔師古の『漢書』の注には「猫牛」と注し、『経』には「作牛」と謂れ、『丹鉛録』に「竹牛」と謂れ、『本草』犛牛と謂れ、『丹鉛録』曰・毛犀、即象也、状が犀の如く然れども小さく、吉凶を善く知り、古人が美猪と称され、交広が神猪と称され」ている。いわゆる「吉凶を善く知り」とは、ヤクが草地・自然気候の状況をよく知っていて、牧人に利きを赴くところで害を避けるのである。また、ヤクは中国の中部地区であまり見かけない獣類のわけで、神獣と思われる。ヤクの鳴き声は猪のようで、猪声牛と称する人もいる。明時代の李時珍は初めて『本草綱目』で家畜ヤクと野生のヤクの区別をもつてする。野生のヤクを「犛牛」、家畜のヤクを「牦牛」と称した。本世紀三、四十年代までに中国科学技術界では野生のヤクを「牦牛」、家畜のヤクを「牦牛」と称した。牦牛（ヤク）に家、野の字を冠（かんむり）して、「家牦牛」（カモウニュウ）と「野牦牛」（ヤーモウニュウ）の区別を示すことに中国現代科学技術界で統一された。各歴史時期のヤクにたいする称呼を調べることはヤクの馴養歴史と発展状況を理解するために役立てられる。

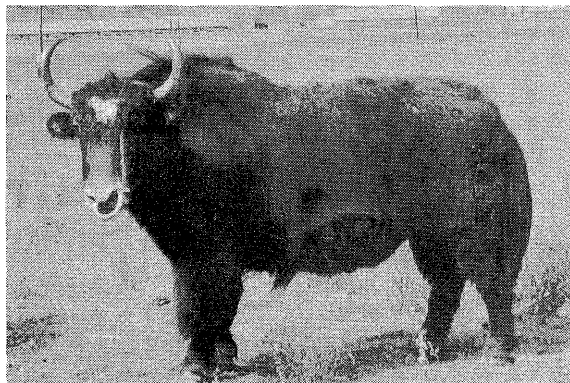
前述したように青海省柴達木盆地境内古代新、旧石器時代の人類社会文化遺跡を発見したが、

その中にはヤクの毛・皮などの遺物を発掘した。その他にチベットの昌都地区のカノウ遺跡で、飼養家畜の囲いとヤクなどの多量の動物遺骸を発見した。また、四川省康定地区で発掘した古代のヤク化石を考証した結果も新石器時代のヤク遺骸だと判断した。

ヤクの馴養はチベット族の形成時期とは分けられない。中国の周代から唐代までには、中国の西部の遊牧民を皆「羌」或「西羌」と称している。甲骨文字の中に「羌」字を「𦍋」とある。『説文解字』を見ると、「𦍋 羌，西戎，西方牧人也。」とあるが、佐藤長氏の研究によると、「実はこれは或る程度正確に羌を説明した語であると思う。これによって従来は、羌 K'iang は羊人の合字であり、牧羊人の意であるとされ、その音は羊の古音 giang に関連したものとして説明されているようである。しかし、私見によれば、この音は本来チベット語の音を写したもので、その実態を示すために適当な羊人の文字が用いられ、その音も表すようになったに過ぎないと思う。恐らくこれに当る本来のチベット語は khyun 又は khyu であり、それは rta khyun (馬の群)・lug khyun (羊の群)のごとく家畜の群の意にも用いられるが、mi khyun の如く人間の集団を指しても用いられるのである (JaTED)。多分後に見るごとく某某羌というのは、彼ら自身が集団の意味で某某 khyun と称し、それが彼等の集団にのみ用いられることから特にこの文字が作られ、羌族という総称が成立したのであろう。而して<羌>がチベット語で解釈できるということは、彼等が確かにチベット語族であったからであると思う。……しかしその羌族の中には農耕を併せ営む集団もあったし、唐代の吐蕃も羌族の系統とされている⁽¹⁴⁾」。しかも西羌伝に青海からチベット地方へかけての集団に限って称されているとすれば、その呼び名は自らこの地帯にもっとも多く住むチベット系諸族を指すことになる。

『後漢書・西羌伝』には「羌無弋，爰劍者……忍季父卯畏秦之威，將其種人附落而南……其後子孫各自為種，任隨所之，或為犛牛(ヤク)種……」と述べている。犛牛種が羌族とはされながらも父名母姓を種号とはせず、多分トーテム的に草原の動物を種号としていたことはいっそうの疑いをつよめるものである⁽¹⁵⁾。今から二千年前の西藏地区には、ヤクを飼養している六大部落——「牦牛部」が存在していた。伝説中の第一代の蔵王(チベット王)聶赤贊普(ニャツザンブ)は「六大牦牛部」の首領に推載された⁽¹⁶⁾。

以上の分析による、ヤク牧畜民チベット族は古羌人の一部族であったことは明らかにした。中国では羌人と言え、古代西部の牧畜民族の総称を指すことである。ヤクを馴養したのは羌族である。ヤクを飼養する歴史が最も長く、経験が最も豊富なのは中国古代の羌人である。すなわち現代のチベット族なのである。



青海省の“玉樹ヤク”

五 遊牧生活におけるヤクと人間の関係

谷泰の研究によると、牧畜という生業活動は生計維持という動機に発した、人と家畜とのインタースペシフィック（interspecific'種間）な相互交渉を基礎としているといわれている。家畜と人間の相互関係は栽培植物と人間との関係とは大きく異なっている。家畜と人間の間では、直接的なコミュニケーションが成り立つが、植物との間にはそうしたコミュニケーションは、神話や超自然界の中で見られる以外、存在しない。しかも、家畜と人間の関係は、世代を越えて継承されるという特徴をもっている。人間の働きかけが家畜に受け入れられると、それはつぎの子孫に受け継がれていくことがしばしば見られる。こうして家畜と人間の相互の働きかけは両者の世代を越えて継承され、世代ごとに確認されあるいは修正されていく。したがって、現在の牧畜社会の家畜と人間の関係は、何千世代も通じた継承の上に成り立っており、こうした壮大な背景のもとに今日の管理体制が見出される⁽¹⁷⁾。

青藏高原の牧畜社会における家畜（ヤク）と人間の関係と一口に言っても、あまりにも漠然としている。そこでヤク牧畜民チベット族の生計活動をめぐりヤクの畜産性と物質生活の関係を、つぎのようにわけて、その諸相を述べてみたい。

（一）ヤクの利用

①ヤクの乳とその乳製品の用法

ヤクを飼育する目的の第一は乳の利用である。ヤクの泌乳は出産期である四、五月から始まり、牧草の枯れる十月以降は乳量がいちじるしく減少するために搾乳しない。したがって九月末頃までの間の搾乳期は、年間一五〇～一八〇日間に限られる。翌夏、青草の生える五月頃になると、子を産まぬ場合もまた乳を出し始める。

乳量は玉樹（ギョクジュウ）ヤクで一日一・一七キログラム、九龍ヤク七二例の記録によると、子を生んだ年の七月の平均日量が一・七三キログラム、一五〇日間の総産乳量三四七キログラムである。翌年にはその二分の一から三分の二となる。乳の脂肪率は泌乳量に反比例し、七・八月は最低となる。二年目は産乳量が少ないため脂肪率は高い。

乳中の固形物は一七～一九％、うち脂肪六・六～七・八％、乳糖五％、乳蛋白五％、灰分〇・八％であり、比重は一・〇三六である。ヤクの乳でつくったバター・チーズは古くからチベット族が農民のツァンパ（チンカという大麦の一種、それを炒めて粉になったものをツァンパという。チベット人の主食である）と交換されてきた。近年はヨーグルトなどともに牧地付近の町で商品として売り出されている。

文献によると、ヤクの乳製品について記載が多い。『証類本草』卷十六中のに、「酥出外国（古代の牦牛国を指す。今の甘牧地区なのだ）亦从益州来。……乳成酪，酪成酥，酥成醍醐，醍醐色黄白，作餅甚甘美，亦時至江南。「酥有牛酥，羊酥，而牛酥勝羊酥，其犛牛優干家牛也」。『本草綱目』には、「酥，犛牛，犛牛乳者上也」。『三農紀』には、「牦牛酥油，乃品之上也」等々と記されている。

近代の探検家の紀行中にはヤクの乳が記している。「雌ヤクからとれる乳は素晴らしい味で、クリームのように濃い。それから作られるバターは黄色で、質においても牛のバターよりはるかにすぐれている。つまり、ヤクはあらゆる点においてきわめて有用な動物である⁽¹⁸⁾」。

前途したように、家畜は食料源であるが、牧畜民が第一に期待するのは肉ではなく乳である。食べるために家畜をつぎつぎに屠殺していったら、ついには財産の家畜がなくなってしまう。したがって牧畜民は普通、家畜の屠殺を最小限にとどめる。そして、なるべく多くの家畜を生かしておき、繁殖させて群れを大きくする。その結果、子を生む家畜の頭数が多くなれば、得られる乳量も多くなる。

得られる乳量を多くするために考え出された基本的技術に、母子隔離がある。哺乳期に母子を一緒にしておく、子はさいげんなく乳を飲んでしまっ、人間が利用できる乳量が減ってしまう。それを避けるために母子を隔離して飼い、人間用の乳をしぼったあと、母子を一緒にして子に乳を飲ませ、そのあと再び隔離する。荒原でのヤク放牧のように畜舎や柵などでの隔離が不可能な場合には、母家畜の乳房を布切れでおおって、自由に乳が飲めないようにするとか、また子に口かせをはめて、飲ませないようにすると同時に乳離れを促進させるような工夫もある。このように牧畜民の食生活にとって、乳は最も重要な食料であり、乳量を確保することが最大の要件である。現代の牧畜民は、ほとんど農耕民との交易関係があつて農産物を入手し、乳のみに食生活を依存している民族はない。しかし、中には特定の季節には食生活のほとんどを乳や乳製品に頼っている民族も残っていて、過去における牧畜民の食生活にしめる比重はきわめて高いものであつたと推定される。乳は栄養学的に見れば完全食品で、乳と乳製品に依存して生活することが可能である⁽¹⁹⁾。

青蔵高原のチベット遊牧民は乳量が一番多い季節に、日常飲用の生乳とヨーグルトに作られる部分を除けば、大半はバターとチーズを作るのに用いる。できあがつたバターは水気をしぼって、ヤクの皮で作った皮箱に入れて保存する。チーズは天日で乾燥して保存して、一年中で食べる。チベット族の生活には欠くことのできないものである。

青蔵高原のバター利用を語る時、まず話題になるのは、お茶である。このお茶はバター茶と呼ばれている。高原の遊牧民にとって、野菜を食べない日常生活には、バターのお茶は一日数十杯飲まなければならないという生活様式が見られる。

チベット族はお茶を好み、朝夕におよそ十分ごとに、一日平均四、五十杯は飲むといわれている。その入れ方はまず煉瓦のように堅く固まった茶を削り出す。これを鍋で煮出し、煮出した茶をドンモという深い木製の茶桶の中に入れてバターと塩を加え、攪拌棒を上下に動かしてよくかきまぜ、できあがつたものを土瓶やヤカンに移し、火鉢にかけて温度を保ちつつ、茶碗に注いで何杯となく飲む。バターのたっぷり入ったこの茶は、乾燥・冷涼な高地で生活する彼らにとって不可欠な食品である。

青蔵高原でのもう一つの変つたバターの利用法は、バターを仏壇の灯明に用いることである。これはどこのチベット仏教の寺院でも見られることであるが、仏像の前に大きなバター灯明が置

かされている。このバター灯明のために消費されるバターの量は膨大なものである。これらのバターは信者からの喜捨によるものである。遊牧民のテントには必ず仏壇がある。その仏壇には必ずバターの灯明が置かれている。

②ヤクの肉

ヤク飼育の目的の二番目は肉の利用である。ヤクの肉は肉質細緻で黄牛の肉よりもよいとされる。中国の東周時代ではヤクの肉が美味なので関内外で名高い。『呂氏春秋』には「味美者牦象之肉也」と記されている。ヤクの肉は蛋白質二一～二二％、脂肪二％～三％、灰分一．一％前後である。

出生時の体重は母体の五％、雄は一四～一五キログラム、雌一二～一三キログラムである哺乳期間の六ヵ月間に毎日三〇〇グラムほど増え、冬までに雄一〇六キログラム・雌一〇三キログラムほどになる。冬期に体重は1/7～1/5ほど減少する。雌は二九～三〇ヵ月齢、雄は四一～四二ヵ月齢までの体重増加が最も早く、順調に育てば、それまでに成獣の七〇％となる。屠体率は、雄五三％、雌四五．九％、去勢ヤク四七．一％という報告がある。

青海省では七～八歳まで飼って、体が大きくなってから肉に出す。青藏高原では、どこの町でも必ずヤクの肉売りを見かける。裏がえしたヤクの生皮に切り分けた肉や内臓を並べて市場や路傍で店開きしている。ヤクの肉は青藏高原の主要な肉食品である。

遊牧民にとっては特定な時期に不要な家畜を処分するためにヤクを屠殺する。その季節に新鮮な肉が食べられる以外、ふつうはヤクの干した肉を食用にすることが多い。巡礼やキャラバンや放牧に出かける時に干し肉は「干糧」（便利な食料）として携帯して食べる。

③ヤクの毛と尾

その他のヤクの利用法も存在する。ヤクは保温・防水にすぐれた毛を持つ。背や横腹の毛は短い、胸から尻にかけての腹側に地面すれすれまで、まるで刈りそろえたように長毛が生えている。これがヤクの独特の外貌を形作っている。走るヤクは、短い尾（の本体）に生えた長い毛の房を持ち上げ、払子（ほつす）のように左右に振りながら走る。これら外部から見えるのは粗毛（直毛）であり、背側の短い部分で七～一〇センチ、腹側の長い部分で二〇～五〇センチ、尾は最も長くて四五～六〇センチある。額にも眼を覆うひさしのように粗毛が生える。粗毛は換毛しないが、刈ればすぐに伸びてくる。

その粗毛の下に冬になると綿毛（絨毛）が生えている。これは夏に脱落するので、脱け落ちる前に引き抜いて採毛する。ヤクの産毛量は、青海省のヤクで雄三．六キログラム（粗毛八一．四％・絨毛一八．六％）、雌一．六キログラム（粗毛四六．九％、絨毛五三．一％）、去勢ヤク二．六キログラム（粗毛六一．一％・絨毛三八．五％）。ヤクの毛は保温・防湿性に優れており、テントのほか、各種毛織物の原料となる。

マルティアリスの書にヤクの毛がはじめて記載されている。彼は一種の雄ウシの尾で作ったき

わめて高価なウシの蠶を払う払子（ほつす）について述べている。基部から毛が多くなっているヤクの尾は、その後東方諸国ではこの目的に用いられてきた。ローマの婦人がドミティアヌス皇帝の時代に、この払子を所有していたことは、東方との陸上貿易が盛大であったことを物語っている⁽²⁰⁾。

マルコ・ポーロは十三世紀にヤクを見ている。彼はココノール（青海）と呼ばれる湖の周辺地域と信じられるタムグートのヤクについて記載している。「この地にはゾウほどの大きさをし、見た目にとて立派な野牛が多数に棲息する。この野牛は背中を除いて全身が長毛でおおわれ、白色のものと黒色のものと二種がある。その毛は長さ三スパンで、絹糸のようなみごとさである」。マルコは珍奇な品だとしてその毛を少しヴェニスに持ち帰ったが、見せてもらった人々は異口同音に稀代のしろものだと断じた。この野牛は全く美しく、これを見かけた人々ならだれでも驚異の目を見張らずにはいられない⁽²¹⁾。ヤクの大きさ（ゾウと比較している）についての誇張がみられるが、その記載は正確で、その体毛は立派で長く、光沢があると賞賛している。ヤクは現在もそうであるが、主として駄獣、労役獣、ときには乗用獣としての機能を果たしている。その乳と毛は重要な産物である。

「法華経に＜犛牛（ヤク）のその尾を愛するがごとし＞、と説かれたる如く、彼らは実にうるわしき房の尾を期せり。特にその白色なるものに至っては、全く雪山を飾るに足る玉房なりというべく、また古代インド王者は、その尾を乗馬の飾りとせり」と河口慧海の旅行記に記されている⁽²²⁾。

タングート人（あるいは＜シ・ファン＞— 当地の漢民族はチベット族をそう呼んでいる。）のもっとも進んだ、唯一ともいえる仕事は、羅紗を作るためにヤク（稀に羊）の毛を撚ることで、これらは現地の人たちの衣服が作られる。毛は家でも、歩きながらでも、先端に紡錘のための撚系装置がつけられている— 1メートルほどの棒で巻き取る⁽²³⁾。縄・袋などの道具もヤクの毛で作られる。

チベット遊牧民はヤクの皮を骨架とし、屋根と周囲はヤクの毛で編んだ粗い布が取り付けられてあり、隙間から空を見ることもできる。この布は雨もりせず、日が当たると縮んで空気と光を通すようにできている。このテントは家畜の移動によって搬遷するが、いくつかの分を分けてたたむことができるので、ヤクに乗せ運びやすい。移動性が高いという生活様式に、このヤクの毛でつくったテントは最適な家と言える。

④交通・運輸手段としてのヤク

一方、食料や衣料とは別の面でヤクの利用法も存在する。ヤクは乗用にも広く用いられている。ヤク用鞍を用い、女・子供の乗り物として放牧時の群れ追いや、春秋のテント移動時に用いられる。競ヤクは毎年二、三度チベット遊牧民の間に盛んに行う伝統的なスポーツである。

乗用・駄用の去勢ヤクは、種雄ほどではないが角は太く、年をとっているものが多いために角が長い。それを振り回すので、近づくには多少勇気がいる。ヤクの角には明確な年周期の角輪が

であるため、すぐに正確な年齢が判る。現地では、二歳の冬にできる第一番目の角輪を四歳として、数え年で年齢を数える。

ヤクの蹄は堅く、蹄の内・外縁と後部が突出し、蹄鉄を打ったような蹄底を持ち、急な崖でも信じられぬくらいの速さで登り降りする。ヤクはこの高山険路を行く能力、沼沢や雪山を苦もなく進み、急流を渡渉する能力によって駄用に使われており、当地の重要な輸送手段となっており、「高原の舟」と呼ばれている。

この地の代表的な動物で、チベット人と切り離すことのできないのは、長毛のヤクである。特にヤクは高度のかなりある丘陵地帯を好む。ヤクは泳ぎが好きである。

ヤクは家畜としてたいへん役に立つ。毛や素晴らしい乳、肉を供給するだけでなく、重荷の運搬にも利用される。ヤクに荷を積むにはたいへんな技術と辛抱が必要である。八〇キロから一〇〇キロの荷を背負って高く険しい山を、ときには危険な小道を巧みに登っていく。その足どりの確かさは驚くばかりである。ときたま野性の羊やヤギがかるうじて通過する岩棚を、はりつくようにして歩いていく。ラクダの少ないチベットでは、ヤクが主として荷を運び、クク・ノール(青海)湖からラサへの大キャラバンはヤクによって編成される⁽²⁴⁾。

駄用として用いられる場合、体重の一八・四％、六〇～八〇キログラムの荷物を積んで、一日二〇～三〇キロ進む。日中歩かせ、夜間放牧採草させると、二〇～三〇日間持続して使える。しかし、冬から夏の放牧地に移動する場合など、気温の高い折りには、一日一五キロほど進むのは無難である。四川のヤクは大きいため、強いものだったら、一〇〇キログラムの荷物を積んで、一日日間進むことができる。短期間ならば二〇〇キログラムほどの荷物を積んで歩く。

ヤクは暑さに弱いため、夏には午前三時頃から正午近くまで歩かせて、あとは休ませる。冬は日中ずっと歩かせることができるし、川や湿地が凍結しているために早く進むことができる。したがって、古くからチベット族は、一年間で収穫した毛や皮や乳製品や草葉などを十二月から二月にかけての厳冬期にヤク隊を組んで運搬した。二月の中を過ぎるとヤクの体力は衰退してくること、またヒツジの出産期で忙しくなるため、その頃までには帰ってくる。

車を曳かせる場合は、体重の九五・六％、四〇八キログラムほどの去勢ヤクで三九〇キログラムの曳力がある。車を曳かせている例はあまりない。四川省では材木の運搬によく使っていた。その際、数本の材木を駄用の鞍に二本の長い棒の先を交差させてくくりつけ、棒の反対の端を地面にひきずり、その上に灌木を切ったものなどを乗せているのをよく見かける。チベット農民は畑を耕すのにヤクを用いる。駄用として用いられるヤクは高齢まで使用することができる。よい駄用ヤクは二一～二二歳まで使った。ヤクを使うには、乗用の場合でも荷役の場合でも、鼻の孔に大きな太い木の輪を通して、そこへ手綱を結びつける。鼻輪を通してあるのだが、強情でなかなかいことを聞かない。乗用・駄用いずれの場合も、ヤクは一頭のみでは思うように進まない。二頭以上だと安心して命ずる方向に進む。

ヤクは好んで雌牛と交配し、この異種交配で生まれた雄牛は荷役においてもはるかに強靱で耐久力があり、比較にならないほど高い値がつけられる。

ヤクを使った場合の輸送量は、人力の場合の一〇～二〇倍となる。ヤク一頭に人夫の荷の二倍、一人のヤク追いは五～一〇頭のヤクを追う。遠距離輸送によって広域経済の成立が可能となり、それによって余剰が生み出された。また、移動性の増大・拡大は、他の都市文明からの文明流入を可能にした。キャラバンに出ることにより、異なる世界との交流が都市文明民としての成長をうながした。ヤクのキャラバン商業の持つ意味は、農牧とも密接に結びつき、労働力を投下して利潤を生み出すものである。

このヤクの去勢技術の普及により、少数の種付け用雄ヤクの遊牧と去勢したヤクの駄獣としての利用は、産業革命、すなわち「輸送革命」と称されている⁽²⁵⁾。

⑤燃料としての排泄物—糞の利用

動物の糞尿はいろいろなところで人の役に立っている。ツルの糞が酒断ちの妙薬などというのは迷信にしても、漁師たちは山中に落ちている糞からその獵物の種類、大きさ、向かっている方向などを的確に推測できる。

また、動物学者は、その糞を分析することによってそこに生息する動物の種類、食性などを知り、また、その糞の数や量からそこに生息する動物数を推計することができる。いわば、糞は動物たちの名刺のようなものなのである。家畜の場合は野生動物とはいささか違うが、より実質的な役立ち方がある。

もっとも一般的なものは、いわゆる厩肥で、糞や尿、そして敷き藁などが混じったものを農作物のための自給肥料として役立つ。糞というのは、餌の不消化部分と家畜の消化管分泌物の混じったものであり、その乾物中に微生物菌体が二〇～三〇%占めることがあり、その分解は比較的ゆるやかである。動物の糞を調べてみるとウマの糞では乾物量二四. 三%、水分量七五. 七%で、糞中の不消化繊維が多く、通風性が良く、堆積時に醗酵は速やかで安易に高温に達する。反対にウシの糞は、乾物量一六. 二%、水分量は八三. 八%で、糞中の残存繊維質も少なく、通風性も悪いところから、醗酵も遅い。このため肥料としての立場からすると、ウマの糞を熱肥、ウシの糞を冷肥と呼ぶことがある。

青藏高原の遊牧民では、この糞を集めて燃料に使用することはよく知られている。その土地の気象条件から、乾燥が早く、からからに乾いて、火がつきやすく、恰好の燃料となり得るからである。このような土地柄では、他に燃料となる材料が乏しいから、これらの糞は、重要な燃料資源であって、常に大切に保管される。この場合、粗目の繊維質の含量の多いウマの糞は火がつくという利点があるが、すぐに燃え尽きてしまうはずである。

しかし、一方ウシの糞は消化の程度が良く、繊維質は細かく碎かれ密になっているので、火はつきにくい、いったん燃え出すと長持ちする、という利点がある。

「牛糞に火のついたよう」というたとえのように、牛の糞は、いくら乾燥していたところで、火をつけようとしてもなかなかつかない。このことから、ぐずぐずしているだけで、物事がいっこうに進まないことの例えである。反対に物事が早く進行することを「兎の上り坂」という。ま

た、「牛糞にも段々」とは、物事の進行には段階があるということである。このことわざは、この辺の事情を物語っている。

すでに述べたように、青藏高原では草以外はほとんどなにもない荒野が一面に広がっている。ウシ科のヤクは牧草地や休息地はいつも糞でいっぱいだが、牧民の主婦は常にヤクの糞を集めて乾燥する。ヤクの糞はいまでも生活と暖房のための唯一のエネルギー源なのである。燃焼のときに火の勢いは強く、持続時間も長い。「たちまちのうちに十キロ近くも糞をするほど大きな肛門を神がヤクに与えたことに、チベット族は感謝している。実際、もしこれがなかったら、燃料を得ることができないので、チベットの荒野を旅するのは不可能である⁽²⁶⁾」。チベット遊牧民はそれが手に入らないと生活は一日として成り立たない。

(二) ヤクの繁殖と管理

①ヤクの繁殖

ヤクの発情は泌乳と同じように気温や牧草の成長の影響を受ける。発情は六月から始まり、ピークは七・八月まで十月に終わるが、十一・十二月まで続く場合もある。発情周期は二十・一±八・二日と変差が大きい。受胎してもしなくても、発情は通常年一度である。生まれる子のうち七二・四%がこの一回の発情で受胎する。二回目による受胎は二三・四%、受胎しないもののうち七三・五%は一度の発情を逸したもので、という記録がある。

発情は早朝か夜が多く、その持続は一二～三六時間で天候の影響を受ける。気温が低く曇天の場合は、持続は短いが、発情は顕著であり、晴れて気温が高いと逆になる。当歳の子を持つものは一般に発情しない。

妊娠期間も二二六～三二九日と幅があり、平均二五五日でウシより短い。出産期は三～八月で、四・五月がピークとなる。

出産後その夏のうちに発情がある場合は、通常九月中に発情がみられる。三・四月出産の例で平均一三〇日後、八月出産ならば平均三七日で発情する。一般に二年に一産または三年に二産であるが、一四四頭のうち六七・四%が連年出産、三年二産が三一%という記録もある。

三〇〇〇例を調べた結果によると、受胎率は八二・二%、正常分娩八〇%、流産二・二%子の生存率は七四・六%であった。双児は、一五〇〇例の中〇・五%である。

雄は二歳で精子形成が見られるが、種畜として用いるのは三・五～六歳からで、通常八歳まで用いる。雌は早いものでは一六月齢、遅いもので三七～三八ヵ月齢、通常二六ヵ月で初めて発情がある。最初の交配は早いもので二六～二八ヵ月齢、通常は三～三・五歳で行う。雌は四～一〇歳の間繁殖力・泌乳量ともピークを示し、四川省では通常一二～一三歳まで出産させる。一般に生涯五～六産、優れたもので六～七回出産する。青海省では一六～一七歳まで飼い、一生で平均六～七頭、多いものでは一一～一二頭子を生むという。大型の四川ヤクは、いわゆる高山品種の特徴を示し、発育・生育が早く短命である⁽²⁷⁾。

②ヤクの放牧管理

a. 夏の管理

夏の放牧管理が重要で、そのポイントは暑さへの対処にある。ヤクは寒冷適応したために被毛の保温性が高く、四肢が短く、首の垂皮がなく、尾や耳は短い。汗腺の発達が悪く、鼻鏡が小さく、陰囊は緊縮し、乳房も毛でおおわれ、乳頭は小さい。このように放熱を防ぐ方向に極端に進化したために、高温時に運動した場合、体温を放散するとが困難となる。赤血球や血中ヘモグロビン量が黄牛より三五～四〇%多いことは、空気の薄さに対する適応である。低地の人々は青藏高原に行くと空気が薄くて高山病に罹るが、チベット族は低地に出掛けると空気が濃くて息苦しいという。ヤクにも同様の低所不適応反応があるのかも知れない。

夏の牧地は、標高の高い涼しい草地で水場の近くが好ましい。夏は一日四～五回は水を飲みに行く。気温が上がる日中は食欲が落ちる。気温が一三度(℃)になると呼吸が早くなり、一六度になると体温が上昇して脈拍が早くなる。二〇度を越すと繁みに横たわり活動を停止する。したがって採食のピークは朝の五～八時と夕方七～九時半頃に分かれる。そのため放牧時間が長くなり、「早出晩帰」が夏の放牧の原則となる。

搾乳ヤクの場合、朝四～五時に放牧し、七～八時に収牧して搾乳する。その後子と共に放し、夜八時か九時に再度収牧する。朝の搾乳時まで子は別の柵に入れるか、別につないでおく。もう一つの方法は、毎夕八時頃に収牧し、テントの近くで採食させて、翌朝七時に搾乳する。その後、子と一緒に放牧する。非産乳のヤクは毎朝早く放し、日没後収牧する。

このほか、定期的に食塩を補う。これにより食欲を促し、水をたくさん飲ませる。牧地は「輪牧」させて利用し、常に新鮮な草を食わせて肥らせ、乳量や受胎率を良くする。夏の放牧は越冬する体力をつける上でも重要である。

夏の放牧でもうひとつ重要なことは、「散牧」させることである。ヤクは長い草を舌に巻いて採草するほか、五センチ以下の草でも舌を使わずに切歯で刈り取って食べる。したがって密集した群のまま放牧すると、草の再生を妨げるほど短く食ってしまう。また蹄で頻繁に踏みつけることも、草を枯死させる原因となる。高原の草地はエロージョンをおこしやすいため、伝統的に「散牧」と「輪牧」の重要性を強調されている。

b. 冬の管理

冬の管理はヤクを寒さから守るところにある。ヤクが寒冷適応しているとは言え、人間の管理下にあるために、寒さから身を守れる場所に自ら移動することはできない。当地の冬の夜はマイナス三〇～四〇度になり、風が猛烈に強いため体感温度は非常に低くなる。冬の管理ポイントは体感を奪われぬようにすることである。

冬の牧地としては、草の質は良く、風が避けられ、凍結しない水場のある、比較的低い平坦な場所が好ましい。冬のテント付近の草は、厳冬期の吹雪のときなどに備えておく。夏と冬用の草地が近接している場合には、冬用草地はサクルーンにして囲っておく。特に冬の牧地に移ってし

ばらくの間はヤクに体力があるので、気温が高く風が弱い日は冬用草地の辺縁部、特に高いところに放牧する。

冬の放牧は「晩出早帰」が基本である。日の出以後放牧し、日没前収牧する。冬は枯草を食べるため、採草時間を長くさせ、日中ずっと採草を続けるよう放牧中は休ませない。一日一〜二回水を飲む。夜間の体熱散失を防ぐよう、風が避けられる日当たりの良いところに囲いを設ける。毎日放牧後囲いの中の糞を出し、雪が積もった場合はすぐに除雪する。囲いの中に、ヤク糞ストープの灰を撒いておけば、地面の凍結を防げる。

c. 子の管理

出産の時に助産の必要はなく、臍帯は子が切る。子ヤクの哺乳は六ヵ月間とし、一ヵ月に子だけをまとめて特に良い草地に放牧する。必要に応じて刈り取っておいた草を与えると良い。これは妊娠ヤクについても同様である。一六ヵ月齢で繁殖用と肥育用に分け、去勢を行い、駄用と共に肥育群に入れる。

子ヤクは体重の七分の一〜六分の一の乳を必要とする。出生後五〜七日は搾乳せずにすべて飲ませる。子ヤクが乳を飲む量は一ヵ月齢の期間は合計六四・二キログラム、以後減少し、六ヵ月齢では二四・四キログラムになる。六ヵ月間に飲む量は二四八・一キログラムである。生後二〇日で草を食べ出し、一ヵ月後には母ヤクについて採草する。そのほか、搾乳前には少し授乳させて、母ヤクの乳汁分泌を促す。

d. 生殖管理

家畜の管理技術の中で、群の管理について重要なものが、この生殖管理である。野澤は、遺伝学の立場から家畜の定義を「その生殖がヒトの管理下にある動物」としている。種雄を管理し、出産期を特定の短い期間に集中させることによって放牧家畜の群れを管理するといったように、出産期の人為的管理は群れの管理にもつながってくる。生殖管理はすなわち人為淘汰についてくる。

青藏高原のヤク牧畜社会では、ヤクの全群の発情が七・八月に集中するように管理するとが重要である。交配が遅れると出産が遅くなり、乳期が短く乳量が少なく、子は育ちが悪くて越冬が困難となる。

群の雄と雌の比は一対一二くらいがよいという。発情雌が二〜四回交尾したあとは、雌の殿部に糞を塗りつける。そうすれば、雄の前肢がすべるため、マウンティングできない。この方法は二六〜二八ヵ月齢以前に発情した若雌にも用いる。この月前齢以前の交尾による出産は、陰裂をおこしやすく子の発育が悪いなど母子ともによくないという。

チベット族は長期以来の経験により、種雄の選択は、十六ヵ月齢前後と三〜三・五歳の二度行う。母牛の能力とその牛の体重・体質・外貌などを見て選択する。種雄として用い始めてからも毎年観察し、性欲が弱いもの、産まれた子の良くないもの、凶暴なものは淘汰する。

経済効率を上げるために、繁殖雌群（搾乳群）を群の四五%前後にするよう努めている。駄用のものは必要最少限度とし、幼ヤクを去勢して、肉用ヤクとする。冬期には通常五分の一〜七分の一が死亡する。したがって冬の牧地を有効に利用するためにも、不要なヤクを秋に処分する。

青藏高原ではまだ野生種のヤクが生存している。現にそのみごとな角は峠の堆石塚に飾られている。現地人によれば、野生のヤクを捕まえて、家畜のヤクと交尾させるといふ。ヤクと普通の牛との交配雑種ゾー（中国語で「驢牛」と呼ぶ）が生産され、この雑種の目的は雑種強勢にあり、それによって体が大きく、力が強く、雌においては乳量が増加するようになる。雑種一代の雄は交尾能力がないが、雌の場合には純粋種の雄とかけあわせることによって、生殖可能だといふ。こうして、雑種をつくることにより、用途（駄獣用か農耕用か搾乳用かなど）をたがえ、また高度差にともなう環境の違いにわけて家畜を飼養している。ヤクを飼う高地と牛を飼う低地の中間の半農半牧の地帯では、ヤクと普通の牛との交配雑種は乳生産と役畜として利用される。繁殖能力が大きだけでなく、力も牛より強く、病気に対する抵抗力も強い。産肉・産乳ともヤクより優れる。

こうした生殖管理は、近代の育種技術の導入とは無関係に、前述したように、青藏高原で古くから行われていたものである。

このように、青藏高原のチベット族は野生ヤクの生殖をヒトの管理下に置き、世代を越えた連続的な過程で家畜化した。野澤謙の研究によると、生殖への管理は時と共に強化されてゆく。これがすなわち人為淘汰であった。言葉を換えれば、家畜化とは動物が受ける自然淘汰が人為淘汰によって徐々に置き換えられてゆく過程にほかならない⁽²⁸⁾。ヤクもこの「世代を越えた」進化によって、役畜をはじめ、肉・乳・皮・毛・絨（じゅう）など多用の家畜として、当地牧民の物質文化の基本資源である衣・食・住・交通・運輸すべてを満たす。財として交換する。牧民の重要な財産である。ヤクの放牧を基盤とする牧畜は、この地域がもつ地形や植生・気候などの自然環境や歴史に大きく影響され、各地の草原のあり方や、ヤクの生態・管理・畜産技術の編成が異なっており、このように、さまざまな興味深い家畜と人間の相互関係が抽出されてくるように思われるのだが、これは今後の課題としたい。

いずれにしても、チベット遊牧民は、青藏高原の自然、すなわち草原的環境を土台にして生活を営んでいる。しかし、高原で一次生産をつかさどる草原は、確かに広大なものであるが、どちらかというと現存量や生産量の少ない疎らな草原であることが多い。この疎らな草原と人間生活を結びつけるものは、有用な家畜の存在と遊牧という形態においてほかにはない。青藏高原の寒冷・過乾燥・そして酸素不足（五三〇〇メートルで空気中の酸素はほぼ平地の半分となる。）などの苛酷な条件での遊牧は、人間にとってももちろん、家畜にとってさえも至難のわざである。しかし、それを可能にしたのは、寒さや高度にめっぽう強くしかも薪を得ることのできない高原で、糞という効率のよい燃料まで与えてくれるヤク、そのヤクの家畜化に成功したことにほかならない。

青藏高原には、草原に依存する生物がたくさんいる。野生ヤクや野生ロバ、チルーやガゼルなどのカモシカの仲間、これらはすぐれた走行力を持ち、広範囲に草を求めることができる。一方、ナキウサギやノネズミなど、穴を掘り草や根を食べるタイプもある。そして鳥やバツタ類も生息する。これらは草原のなかでは第一次消費者に位置づけられるが、家畜のヤクやヒツジなどは生態学的にはこれらと立場が同位である。これに対し遊牧民は、家畜に依存する第二次消費者として位置づけられ、草原ではむしろ、生態系の頂上にあるワシ、タカなどに近い位置にある。家畜は遊牧民の生活必需品の大半をまかなう。先に述べたヤクと人間の関係を見よう、ヤクは食料としての乳や肉だけでなく衣料やテントとなる毛、搾乳などの容器となる角、そして燃料となる糞まで、どれもすべてが有用である。草は燃料としては不適であるが、家畜を通してすぐれた燃料にかわるのである。

要するに、チベット遊牧民の生活では、基本的な物質は自給自足するという一線が貫かれているとあってよい。必要なものは自然から得る。そして、それらは有効に活用され、捨て去られるものは何一つとしてないようなのだ。無駄のない生活である。そこに厳しい自然環境がもたらした生活の知恵が貫かれている。

六 青藏高原における牧畜社会の経済的基盤

青藏高原の牧畜民はどのような経済的基盤にたっているのだろうか。ヤクの長い家畜化の過程における群れの管理、生殖管理、生産管理を通じて、チベット族はしだいに家畜を食糧として、また経済的・文化的な意図のもとに人為淘汰をくりかえし、今日の牧畜社会を形成してきた。他の牧畜社会と比べると、チベット牧畜社会が例外でなく、牧畜を生業として成立させたもっとも大きな要因は、搾乳であったとも言える。乳が全哺乳動物の子どもを育てる完全栄養であることを牧畜民が見逃がすはずはなかった。家畜化の過程で、乳量の多い家畜を人為淘汰し、その結果牧畜民は、農耕民と地理的に離れ、農耕に適さないより乾燥した土地に適応していったものと思われる。当然のことながら、乳は家畜の固体数を減らすことなく、日常的に摂取できる。一方、肉の利用は家畜化以前の狩猟時代にさかのぼり、今日の牧畜民にいたっている。ただ、ヤク牧畜民をのぞけば、牧畜民は肉をかならずしも日常的に利用しているわけではない。むしろ、その逆であることが多い。肉を目的として家畜を屠殺することはまれで、儀礼時に限っている牧畜社会も少なくない。青藏高原の牧畜社会のように、ラマ教のヤク殺生が不禁止、儀礼時にヤクの犠牲と代表的なヤク放生していく。ヤクの不屠殺原因は遊牧民がヤクの肉を目的としての家畜ではなく、ヤクのような大家畜は主に儀礼に際して殺し、或いは病気や老ヤクを殺し、チベットヒツジ（蔵羊）といった小家畜を必要に応じて屠殺する、といった家畜の種類によって利用の仕方が異なっている場合もある。ともあれ、青藏高原における牧畜社会の主要な経済的基盤になっているのは、ヤクの乳、血、そして肉三種類である。

ただ、家畜によって全生計をたてている純粋な牧畜社会はたいへんまれであり、歴史的に見てもきわめて特殊なことであったと思われる。ほとんどの牧畜民は自分の社会内で農耕を営むか、

農耕民との接触によって穀物を得ていたのである⁽²⁹⁾。青藏高原のチベット牧畜民の中でもっとも専門的な牧畜民であるとみなされている遊牧民でも、彼らの食生活は交易によって農作物を補給しないと安定しない。チベット人は、ごく稀な例外を除けば、農耕に従事せず、他の必需品同様ツァンパの買い付けに、彼らにとってもっとも重要な交易地であるドンキルの町に出かけて行く。彼らはここへ家畜を追って行き、毛皮や羊毛を運んで、これらのすべてをツァンパ、タバコ、長靴などと交換なのである。クク・ノール（青海湖）やツァイダム（柴達木）では品物の値段はお金でなく、交換するために連れてきた羊の数で決められる⁽³⁰⁾。

ツァンパというハタ麦を炒めてひいた製粉は一つの主食として、遊牧民において毎日取り扱わなければならない生活できないのである。

このように青藏高原の牧畜民がかたわらで穀物に依存していたとしても、私たちは牧畜をひとつの独立した生業とみなし、諸特質を分析していくことの意味をなんら失うものではない。それは、人類が依存してきた生業経済の諸類型を見ると、生業の対象—主体という論理構造からすれば、明らかに農耕社会とは異質のものであり、対象である家畜によって規制され、はぐくまれてきた文化や社会の特性はあまりにも大きいからである。同じ意味において、牧畜社会の経済的基盤をまずモデル論的に穀物と分離させ、家畜と人間の相互関係から見ていくことで、むしろその特質が浮きぼりされるにちがいない。

牧畜という生業を生態系の中でみるなら、自然の有機物・太陽エネルギーのもとに育った植物を家畜を媒体にしてより効率的な乳・血・肉に変えて利用する生業ということになる。しかし、このような抽象的エネルギーレベルの生態学における牧畜の位置づけでは、具体的な家畜と人間の関係の分析は生まれてこないし、ほかの生業との的確な比較をすることもできない。いったい牧畜という生業では、どの程度労働量を投入して、どの程度の生産量がえられるのか、そのインプット—アウトプットの分析がもとめられるのであるが、今日まで体系だった調査はなされてこなかった。

青藏高原の牧畜社会において、遊牧は家族単位で行われる。通常四、五人から六、七人で遊牧の仕事はすべて分担制である。家畜はヤクをはじめ、ヒツジ、ヤギ、ウマで構成され、チベット犬を飼う。低年齢層がヤギやチベット羊の放牧を、成年年齢層がヤクの放牧を、女性は乳搾り、ハタ麦を炒めてひいてツァンパを作り、ヤクの糞を燃料のために集積することなどを行う。ヤク五〇頭前後、その四、五倍のヒツジとヤギ、そして数頭のウマからなる場合が多い。これは、モンゴルなどの平地で、ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダを五畜とし、財産という意味のマルという語で呼び、それにロバ、ニワトリ、犬などが加わるのと異なっている。

ヤクは青藏高原のチベット遊牧民の最も重要な家畜なので、その乳・肉・毛・角・糞などすべてが有用である。「高原の舟」に喩えて、移動のさいの荷駄にも欠かせない。それだけでなく、彼らは畜産品や草葉や岩塩などをヤクの背に載せてキャラバンを組み、交易の旅に出かける。物々交換による利益を得て、主食を確保するのである。ヤク・キャラバンによる交易が、生活を維持する大事な仕事であることを示している。チベットにおいてヤクが経済単位となっている側面は

「婚資」においても観察できる。古い時代であるほど、婚資をヤクで払うという伝統的慣行は観察できるはずである。最も貧しい家でも、少なくとも三頭のヤクを嫁方の家に送らなければならない⁽³¹⁾。

青藏高原は遊牧民・農耕定住民・半農半牧民の三つの層が重なる伝統的チベット社会の中にあつて、基層文化を保持していた遊牧社会の基本的家畜であったヤクは、青藏高原のもっとも基礎的な経済単位であると言える。

七 青藏高原におけるヤクのトーテム神話

前述したように、このような名声が高い物質文化の基礎を持っていることで、ヤクは精神文化の領域に入るのは道理にかなって無理のない形になっている。ヤクは重視されて精神文化の領域に入った後に、実在物から神異物の神秘化に変わってきたのである。これは青藏高原の動物トーテムからはっきり見られる。

青藏高原のトーテムについて話すならば、青藏高原の代表的動物であるヤクは最も典型的なトーテム動物である。

すでに述べたように、ヤクはウシ科の一種で、最初から青藏高原に生息している野生動物である。野生のヤクはチベット族の馴化によって、今日の役畜ヤクになったのである。しかし古代において、青藏高原ではヤクの数多くは、極めて獠猛な野獣なので、常に当地住民の生命に脅威を及ぼしていた。青藏高原の遊牧民は、今でも野生のヤクの猛威を畏怖する。野生ヤクとチベット住民との関係は人間と自然との闘争関係の集中的な表現である。チベット族が語り継いでいるケサル王の英雄伝の中には、北方の悪王の魂であるヤクを討ち、その力を殺ぐ話が語られる⁽³²⁾。チベット史書にもチベットが古代に牛魔王に統治されたことをも記載されている。吐蕃時期に入ってもまた多くの人々は野生ヤクの蹄下に死んだ。当時の法律によると、人の危急を見て救わない者に対して罰金を課するか、或いは狐の尾を掛けて辱めを示すことになる。被救者は必ず恩人に対して報酬を納めるか、或いは姉妹を（婚約者として）ささげる。チベット住民のこのような超自然の力に対する態度はその他の原始人と同じような二重性を持っている。一つは、自らの力で努めて自然の力にうち勝つことにしようと図ることである。自らの智慧と勇敢により獠猛な野獣を家畜に馴化して、役畜と乳・肉用畜になった。ヤクの馴化は古代遊牧チベット族が自然力と闘争することの集中的表現形式である。換言すれば、ヤクの馴化過程は古代チベット族の物質生産活動の重要な表現だと言える。このような動物と人間の関係は物質生産の関係を構成したので、これによってヤクは古代遊牧チベット族のトーテムを導いた。一方、ヤクは神化され、神霊或いは神霊の伴侶、乗物などとしている。古代チベット族の神話中ではヤクが「星辰」と称され、昔ヤクは天上に住んでいたという。チベット古代の若干著名な土着神、例えばヤラシヨウバ（雅拉香波）神、ガンディセ（岡底斯）山神などはみな白ヤクに化身した。そして、ヤクに化身した神霊およびヤクと関係ある神霊でさえあれば、しばしば最も原始的な土着神である。青藏高原では多くの山峰、峠、家屋の入口の横檻にヤクの角を置き、若干の寺院、経堂の入口にヤクの干屍

を掛けて、悪魔を除き邪気を去るためなのである。甚だしきに至っては敵の品物をヤクの左角に入れて、「ヤク伏魔法」といった呪術を施行する。これらのすべては、実際にヤクのトーテム崇拜の変異形式だと言える。ヤクのある器官を崇拜し、それを神器とするのは、ヤクを神化した後、人々がヤクのトーテムの力を借りて自然災害を克服し、悪魔を取り除くとの作用に達する。

チベット族のヤクのトーテムに関する信仰は他の民族の動物トーテムの信仰と異なる個性的な特徴を持っている。他の民族はある動物がその氏族のトーテムとなってから、その氏族はこのトーテム動物を殺したり、傷つけたりすることは許されないという禁忌があり、トーテム動物としての同一類の動物はすべて神霊、祖先となされ、すなわちトーテム動物の群体を崇拜する。チベット族にとってヤクは民衆生活との密接な関係があり、また自分自身と異なる超自然力の変化とされ、これによってヤクはトーテムを導いたが、ヤクはトーテムに成ってから、禁猟禁殺としての禁止などはない。ヤクは高原の重要な役畜・乳畜・肉畜などとされてきている。ヤクのトーテムの過程は、すなわちチベット族に家畜化された過程なのである。もし上述したようにいろいろな禁忌が存在すれば、必ず高原住民の生活に大きな脅威になる。ところで、トーテム崇拜は経済生活の曲折反映にはかならない。もしこの原則を違反したら必ずほかの何かの部面に変通しなければならぬ。ヤクのトーテムの特殊性は共通性の特殊な表現方式の一種にかならない。本質的にそれもトーテミズム儀礼の種々な禁忌を遵守している。チベット族はトーテミズム動物の禁殺観念に抽象・集中を加え、多くのヤクのなかからヤクの「代表」を選び出し、「神ヤク」として山へ放生しに行く。そのヤクを禁猟禁殺にすることによってトーテム動物の禁忌を表示するためである。このような観念の最高のな体现は、神牛に対する崇拜観念を抽象化し、ヤクの屍体・牛角などのものに対する崇拜・禁忌が群体ヤクに対する崇拜・禁忌に代わってきた。或いは観念領域のヤクは実体のヤクに代わり、ヤクに関するさまざまな神話を生んだべきである。

青藏高原の甘肅，四川，青海三省の交差の地帯——青海省果洛（カラク）チベット自治州に生活しているチベット族の間には次のような神話が伝承されている。「大昔、チアンムボンという青年は果洛地区の年宝玉載匝日（ネンボウギョウゼチャニ）大雪山付近で、鷹が小さい白蛇（山神の息子）を捕まっていたところに出会った。この青年は鷹に白蛇を自分の手に投げ落とすことをお願いし、山神の息子を救った。山神は謝意を表すために、山神の三女をこの青年の妻とすることを約束した。この山神の娘は白ヤクに化けてこの青年と面会に来た。彼は帯状の五色の布を巻きつけている棒で白ヤクをぼんとついた。白ヤクは美しい娘に変わって、青年の妻となった。結婚後、青年は無意識の間に自家のヤクといつも嬉戯れしている一頭のヤクを殺した。また、山へ放生していった神ヤクを殴ったので、妻が怒って天宮へ帰っていった。彼女は唯一の息子を残したが、その息子は以後の子孫を繁衍して、今日の上，中，下三つの果洛（カラク）となった⁽³³⁾」。

この神話は典型的なトーテムの神話である。神話中では氏族の祖先はヤクとの婚姻を誓い氏族を繁衍させてきた。トーテム動物——ヤクはこれらチベット族と直接的な血縁関係がある。果洛部は典型的な遊牧チベット族なので、彼らの生活様式とヤクの経済生活中にある地位による。だから、神話中に山神の長女と次女は獅子と竜（或いは蛇）の変身で会いに来たときに、青年は彼

女らを捕まえて自分の妻とすることができない。これはチベット族にたいして、獅子と竜は後来からほかの民族から受け入れた「動物」という観念なのである。或いは、一種の抽象的、観念領域内の動物で、当地の人々の物質生産と生活需要との直接な関係が発生していないから、氏族のトーテムになる必要な条件がない。神話中の切安木朋（チアムボン）がヤクを殺したことや山へ放生していった神ヤクを殴ったことは、氏族のトーテム禁忌を違背したのである。懲罰的手段として彼の妻が怒って天宮に帰っていった。上述の神話には幾つかの異文があるが、その中の一つは年宝玉載匝日（ネンボウギョウゼチャニ）という山神自身が白ヤクなのだという。このように山神ヤクの伝承系統が形成させた。ヤク山神——ヤク山神の娘——ヤクと人類祖先の婚配関係から氏族までに伝えてきて、比較的ヤクのトーテミズム族源の神話系統が形成されたのだ。なぜ神話のなかでヤクが山神の化身となったかについては、それはトーテム崇拜と自然崇拜の交錯あるいはしみこむことなのだ。ヤクは山のなかに活動しているから、原始人の思想には連想が生まれやすい。自然崇拜のなかの山神とトーテム崇拜がヤクをつなげていたものだ。トーテム動物と山神のつながりによって、ヤクは山神の観念を通じて形成された山神と天宮との連絡ルートから天界に入った。だからヤクは天宮から降りた天神、ヤクは天上の星辰と思われた。果絡のヤクトーテム神話のヤク妻は怒って天宮へ行った。本数の経書にもヤクが天宮から岡底斯山（ガンディセ）の山頂に降りたと記載されている。

これと似ている神話がチベット族の史書の中にもいくつかある。『王統世系名鑑』⁽³⁴⁾を引いてみると、止貢贊普と大臣羅旺達孜が決闘したことが記載させている。羅旺達孜は計略を使って贊普を殺して、王権を奪取した。そして止貢贊普の王妃が馬の放牧をさせることを命じた。王妃は牧場で馬を放牧しているときに白人と一緒に寝た夢を見た。目が醒めると白ヤクが身辺を去っていったことが見えた。その後、王妃は球状になっている血を生んだ。その球状の血を野生ヤクの牛角の中に入れて息子を孵化した。この息子は西藏歴史上に有名な如列吉（ジュレイギ）なのである。（いわゆる「牛角の中から生まれ出した人」という意味である。）伝説中には第九代の蔵王布帶鞏甲（ブダゲグンジャ）の大臣である。彼は木犁の製造、鉄鋼の冶煉、煉炭などの技術を発明したという。チベット史書では彼を「七賢臣」の一人と称している。この歴史的な意味が含まれ神化された故事は、作者が当時の民間に流行しているヤクのトーテム型の族源に関する神話と若干の歴史事実によって混じって、史書に書き入れたものである。神話の中にはヤクの産んだ子はチベット歴史上の賢明な大臣として、またチベットのいろいろな農牧技術の創始人とも考えられた。この方面からは神話の歴史的成分が含まれたものが見られる。一方、神話にはトーテム動物の生まれた始祖は往々該民族の物質技術の発明者と伝播者なのだという特徴がある。

『王統世系明鑑』の書く時代は一三八八年代である。大体約六〇〇年の時間を経て、一九八〇年代にチベットの民間文学者はチベット西北部の那曲地区の班戈県、聶栄県で調査したときに上述の神話と同一類型の神話を収集した。班戈県で流传している神話は次のように述べている。大昔、一人の牧女が蔵北草原で放牧している。ある夜、彼女は白い服を着ている人が念青唐古拉山（ニエンチエンタングラ）から降りてきて彼女と愛しあった夢を見た。その後しばらくして彼女

が子供を産んだ。その子は力が非常に強い。彼は父親の念青唐古拉（ニエンチエンタングラ）山神の導きによって、山神に承諾を与えられた娘と結婚した。その後、彼は妻を言い含めておいたとおりにナムツオ（那木湖）の辺りに自分の子供を連れに行った。彼は湖の辺りに着いたときに、雌ヤクが子ヤクの身体を舌先でなめていた。この青年は子ヤクに矢を射ったが、あの雌ヤクは自分の妻に変わった。彼女は涙を流しながら「あなたが自分の子供を殺した」と言った。この神話中の山神と牧女の産んだ子供はほかの神話中にあった氏族祖先の特徴を持っている。彼は山からヤクを追ってきたが、今日のヤクそのものなのだとということが神話中に伝えている。聶栄県の神話では、聶栄最大の扎馬（ザマ）部落は彭木札（ポムムザ）山神を崇拝している。扎馬部の最初の第一位頭人は彭木札の息子である。名前は絡赤（ローチ）という。絡赤の母親は牧女なのである。夢の中では彼女は白衣を着て、白馬に乗ってきた人と寝ていた。その後、この牧女は妊娠して絡赤を産んだ。絡赤は成人してから、扎馬地区の首領となった。しかし、彼は扎馬人が偷盗、強奪の習性があるので、統治しにくいと思って扎馬を離れた。彼は彭木札山のふもとに休憩したときに、白人に化けた父親が彼に扎馬へ戻って再び首領となって下さるようにと勧めた夢を見た。絡赤は父親の勧告に従って、扎馬に戻って首領となった。この神話中の白人、あるいは白人が白ヤクに化身したものは、実際に同一類型の神話の不同の変異である。それは雪山の山神が白ヤクあるいは白人に化身したものは、チベット族の神話中の特有の筋である。

その外、謝継勝氏は一九八六年夏、曲水地区の「協絨野牦牛舞」（シャヨンの野生ヤクの踊り）を調査したが、この民間演劇はヤクのトーテムの現象から引き起こされた典型的なトーテム舞踏であることを発見した。劇は五人の扮装した役がある。その中の四人は二人ずつそれぞれ野生ヤクの皮を被って雄、雌のヤクに扮している。もう一人は白色の仮面をかぶって吉祥な白人に扮した。演劇の開始には、まずは一頭のヤクが舞台に出て、頭を揺らして抵抗、闘いの動作をした。この間白人が舞台に出た。そのあとすぐにもう一頭のヤクが舞台に出た。二頭のヤクは白人の両側に立ち、白人はヤクを調教し、最後に白人はヤクの角にハタ（条状の白い布、チベット族特有な礼儀）を掛けた。音楽は銅鑼を擦る音で、リズムは簡単である。白人に扮している老芸人の話によると、彼は十一歳の時にこのヤク舞を学んだ。劇団の団員はヤク舞の起源が十七世紀の五世達頼・阿旺羅桑嘉措（ダライ・アオウランジャツォ）の時期なのだと聞いた。伝説によると、五世ダライはある夢の中で、協絨（シャヨン）の草山では二頭の雄、雌ヤクが角と角をつっかいして遊び戯れている夢を見た。五世ダライ・ラマはこれは一種の吉祥の兆候だと考えて、野生ヤク舞を演ずることを命じた。もう一つの伝説には、ダライ・ラマはインドからチベットへ戻った途中で、大雪に遭って困った。そのときに、二頭のヤクが彼らに雪道を分けて、ダライをガンダン寺（甘丹寺）に迎えに行った。実際にこれらはみなトーテム舞踏についての解釈である。

老芸人の話によると、彼はヤクの皮を被って劇場の外でこっそりと学んでいた。ヤク舞の中の白人は白い仮面、白い服を飾っているのは、神話中の山神あるいは白人に化した白ヤクを模倣したものである。協絨（シャヨン）地区の神話によると、この二頭のヤクは神が変わったもので、天上から人間界に降りてきたものだという。雄ヤクは乃群寺（ナイクン寺）の護法神、すなわち

宗喀巴（ツンカバ——ラマ教の始祖）の護法神——唐堅却傑（トウジャンチャジャ）である。雄ヤクは班丹拉姆女神（ハンダンラム女神）の化身——班丹瑪索姆（ハンダンマソジェム）の幻身である。そして、この女神は拉薩（ラサ）の保護神なのである。

ヤクのトーテム神話は広く流伝して、ヤクの神話は五世ダライの伝説と結びついた。さらにヤクはチベットでもっとも権勢をもっている護法神の変幻神なのである。このように、原始神話についての信仰はチベット地方政府の神学を構成した基礎と有機的に融和した。班丹瑪索姆女神をヤクのトーテム神話と融和したことは人々の原始的なトーテミズムの心理状態を反映し、トーテムの加護を得たいとするのである。このようにヤクの神話から神霊の体系方面への演変および仏教化の過程をのぞいた⁽³⁵⁾。

この「協絨野牦牛舞」と似ている舞踏はほかの非牧畜地区にも見られる。チベット族居住の隣辺地区ではこのようなトーテム舞踏の変体が存在している。例えば、西寧地区の正月のお祭りの中では、「地方性」の番組——「ヤク舞」なのである。ヤクの造形はきわめて簡単であるが、舞踏の内容は「協絨野牦牛舞」と大抵似ているが、漢民族の獅子舞の歩法を引用している。地域での考察によると、ヤクのトーテムは神話トーテムからトーテム舞踏、戯劇までに発展してきた全過程を完成したものである。

つまり、ヤクのトーテム神話は青藏高原のチベット族の起源において象徴的な関係でむすびつけられていることをあらわしている。

八 ヤクと「もう一つのシルクロード」

現在のヤクの利用状況とは別に、過去の歴史において、現在よりもっと壮大なヤクの利用が行われていた。今から約一三四〇年前、チベット王国は大唐帝国と並ぶ東アジアの強大な勢力で、漢名「吐蕃」と呼ばれた軍事大国であった。その古代チベット王国は唐と戦って、一時、その都長安を攻略したこともある。隴山（ろうざん）以西の東トルキスタン地方（敦煌を含むシルクロードの西域南道一円）を八四六年まで約一〇〇年間にわたって支配していた。

チベット遊牧民国家は早くから唐の脅威であった。六四〇年、唐の太宗皇帝は王女の文成公主を多くの従者・仏像・僧侶・医師らをつけてチベット王の妃として送っている。同じ頃、ネパール王国からもその王女ティツン公主がヒマラヤ越えをしてチベット王のもとに嫁がしている。つまり、七～九世紀は唐の長安とネパール、インドが、チベットを介して直結されていたのである。「もう一つのシルクロード」がここに存在している。この事実は日本のシルクロード研究者に長い間無視されてきた。このラサ経由の「シルクロード」は玄奘三蔵の辿った砂漠と天山越えの困難な道にくらべて決して劣るものではなく、むしろ中国と釈迦の国インドと結ぶ最短の道路であったとの報告があった⁽³⁶⁾。

色川大吉一行は自らこの古道を踏査した。唐の都長安から古代チベット王国（吐蕃）の都ラサに通じる「入吐蕃道」は中国とインドとを最短距離で結んでいる「もう一つのシルクロード」に違いなかった。ただ、この「唐蕃大道」という呼称も使われているが、文字通りの大道があった

わけではない。世界でも屈指の険路で、地図を開いてみれば分かる通り、四〇〇〇メートル級の高原を突っ切り、いくつかの大河の上流を横切り、湿地帯や大草原を渡って行かなければならない。この古道は今、途中までの道しか車は通れず、ヤクや馬を使う必要がある上に、清水河を過ぎ、金沙江（長江）をわたり、廃道になった部分がある。そこで、色川大吉一行は行けるところまで前進しよう、ということで、雪解けの悪道に苦しみ、高山病と戦いながらも黄河源の瑪多まで到着した。「入吐蕃道」の沿線にはいくつかの遺跡を訪ねていったが、青海省都蘭県にあった遊牧民の「王」の壮大な古墳からには、中国の考古学者がシルクロードの存在を実証する古代絹や文字や絵画のある木片などが見つかったという⁽³⁷⁾。

また、最近、青藏高原の西部で、大規模石窟遺跡群「皮央（ピャン）・東嘎（トンガ）」を発見した。石窟にはチベット仏教の曼荼羅をはじめ、菩薩や飛天、動植物など、西方の影響を色濃く受けた仏教壁画が色鮮やかに残る。石窟は大がかりな盗難もなく、保存もよいという。これは従来シルクロード研究や日本仏教伝来史など東西方文明交流を研究するうえで貴重な資料だという。シルクロードに詳しい平山郁夫・東京芸術大学学長は「敦煌が中国の西の玄関とすれば、この遺跡は中央アジアの南の玄関だったのではないか。壁画にはヘレニズム文化からガンダーラ美術まで、幅広い影響が見られ、豪華である。当時の、様々な民族往来の光景が目には浮かびます」と語っている。

西チベットの一角に二千窟以上の規模をもつ遺跡が発見されたという報道は驚きをこえて秘境の真面目を実感した学者が多かった。従来、仏教文化の東漸の道、つまりはシルクロード沿いに数多くの石窟寺院のあることは、日本ではよく知られている。アフガニスタンのパーミヤ石窟、またクチャのキジル千仏洞、クムトラ千仏洞、そして有名な敦煌鳴沙山莫高窟千仏洞、さらには中国本土の大同雲岡石窟、洛陽龍門石窟などが数えあげられる。大規模を誇る敦煌千仏洞も、かつて千以上の石窟があり、現在約六百余が確かめられていて、文字通り千仏洞の呼び名に相応しい。そして、千仏洞のイマージュを越える遺跡など、地球上にあるはずがないと思ひこんできた。ところがごく最近、中国考古学者が二千窟以上の石窟を発見したというのだ。現地はチベット自治区の区都ラサから約二千キロ西の標高四千メートル余りの高地である。石窟遺跡は世界一の標高である。遺跡のすぐ八〇キロメートル西はインドとの国境線で、すぐ南方には、かの大文明を生んだインダス川（現地名は象泉河）の源流が流れ、隣接地域との文化交流を想像させる。「この周辺一帯は、東西をつなぐシルクロードの重要な拠点だったのではないかと想像している⁽³⁸⁾。

これらの二千窟余の石窟に極めて保存の良い壁画類が描かれているらしい。豪華な彩画意匠をもつ石窟天井があるが、中央アジア石窟構造によく見られる持ち送り天井である点が注意をひく。インド本土のアジャンターやエローラ石窟構造にない、中央アジア式と呼んでも良い構造である。今回の二千窟をもつ遺跡は五千に近い高地で、湾曲した河川により舌状になった摩崖（まがい）に掘られていて、頂上に寺院址か王宮址と思われる破壊された遺構が望まれる全景写真がある。敦煌千仏洞やキジル千仏洞、また、雲岡石窟と似た地形、環境であることも分かる⁽³⁹⁾。

この大石窟群は重要な宗教、美術の価値があるだけでなく、中国、チベット、日本を含めて

アジア文明の研究にも、重要な資料でもある。中国文化の理解にも、日本文化の解明にも、チベット文化、チベット民族の生活様式を探ることが大切である⁽⁴⁰⁾。

しかし、こんな大規模、多様な大石窟群を造るには莫大の費用を要したのであるが、彼らは何を経済基盤としたのであろうか。もう一つは、当時の交通、運輸手段とは何であるという問題がある。その石窟の発見者は壁画を撮った写真の中にヤク、馬、鹿に乗った貴族たちの形体から、ヤクは古い時代から家畜化され、荷運びや乗り物としても使用されたことが分かる。特にこのような高地でヤクを交通、運輸の手段としては最適ではないかと思っている。秘境としての高地ではこのような大規模石窟を中央アジア式と呼んでもよいとすれば、ヤクこそこの中央アジアの独特な家畜だけではなく、中央アジアの文明を創造するために重要な役割を果たしたとも言える。

敦煌は東西文化交流の西口であれば、青藏高原の皮央・東嘎（ピヤン・トンカ）遺跡群は南口であることについての語りが強まっている。ラクダは前者の文化交流中で「砂漠の舟」としてあまり有名なので、ヤクは「高原の舟」としては確かで疑わないと思っている。

「世界の屋根」であるチベットの秘境だとするイメージは、だんだん希薄になって多くの人々が意欲こそあれば訪れることが可能になっている。探検とか秘境といった言葉が死語になりつつある。夢がなくなって寂しいことおびただしと思っている。

九 青藏高原の文化特色

中国各地の文化と青藏高原の文化を比較すると、次のようにまとめられる。

中国は淮河（わいが）から秦嶺（しんれい）山脈を境に気候ががらりと一変する。北は寒冷で乾燥、穀物はアワ、ヒエ、キビ、大麦、小麦。南は温暖で湿潤、穀物はコメである。この気候風土からできたのが北の小麦文化、南のコメ文化である。

北は草原砂漠を主要舞台に馬などの牧畜業が盛んとなり、麦作の農業と一緒に、肉とパンの文化。南は魚や貝などの海産物をとる漁労文化が生まれ、水田稲作農耕とあいまってコメと魚を主食とする文化となる。

また、南船北馬という言葉があり、北の馬の文化、南の船の文化と言い表したもので、古代では「胡人善騎、越人善舟」とも、華北の胡人は騎馬に優れ、南の越人は舟をよく漕ぐという意味で南北の文化をよく言い表している。

こうした文化を背景に生まれた思想、哲学、宗教が二大潮流である北の儒教、南の道教というわけである⁽⁴¹⁾。

もっと細かく分析すると、秦嶺山脈以西の「崑崙—祁連山線」を境に独特な青藏高原気候が一変する。広大な土地と多くの民族で構成される中国でありながら、どうしても文化の構成も民族性、地域性の差異によってさまざまである。

先に述べたように、青藏高原は特有の地理・気候などの自然条件下に農耕ができないが、面積の広い（一四〇万平方キロメートル）草原があり、生産活動として牧畜業が行われ、牧畜文化が生まれたのである。青藏高原における牧畜業を述べると、その特有の家畜種類のなかではまず第

一にあげなければならないのはヤク、長毛の牛である。

ヤクの特徴は、厳寒、枯草期、氷雪期と低酸素に強いことである。そのために、五〇〇〇mを越える高地でも飼養することができる。原住民はヤクを、役畜をはじめ、肉・乳・皮・毛・絨(じゅう)など多用の家畜として飼養している。ヤクは当地牧民の物質文化の基本資源として、衣・食・住・交通・運輸すべてを満たし、財として交換する。牧民の重要な財産である。

ヤクは青藏高原の欠くことのできない家畜として幅広く利用されており、牧民の精神文化にも重要な役割を演じている。だから、青藏高原はヤクの文化とも言える。こうした文化の背景に、インドで発生した仏教は青藏高原に定着し、チベットのラマ教が生まれたのである。

ヤクは青藏高原の風土に適応する独特の家畜である。地下の発掘調査によって、ここでは五〇〇〇～一〇〇〇〇年前からヤクを飼養していたことが立証されている。ヤクの放牧を基盤とする牧畜は、この地域がもつ地形や植生・気候などの自然環境や歴史に大きく影響され、各地の草原のあり方や、ヤクの生態・管理、畜産技術の編成が異なっており、放牧ヤクを基盤とするさまざまな民俗にも影響を及ぼしている。このような民俗文化はさまざまな形式で青藏高原のヤクの牧畜文化の特色を示している。

具体例をあげると、ヤクの乳製品であるバターの加工や貯蔵の方法は地方によって多少差異があるが、人体に必要な蛋白質やビタミンはバターから摂取される青藏高原独特の食生活を生み出してきた。バターは古くから牧民が農民のツァンパ(ハダカムギをいためてひいた粉)と交換されてきた。また、ラマ教寺院の仏壇でもバターを灯明に用いる。ヤクは青藏高原の欠くことのできない家畜として幅広く利用されており、牧ヤクの民俗文化を離れて青藏高原の牧畜文化を理解できない。

おわりに

(一)

青藏高原は中国の「西部」において古くから牧畜を行っている。緑の草原のあちこちには、草を食むヤクやヒツジの群れが見られ、小川や湖のほとりには、ヤクの毛でつくった黒いテントが立っている。そこでは、一年中老羊皮でつくった服を身に着ていたチベット族の女性たちが乾燥した牛糞を燃やして乳茶をつくったり、川や湖で水汲みをしたりして忙しく立ち働いている。数百キロ以内では、ムウムウ、ミャァミャァというヤクやヒツジの鳴き声や鳥や獣の鳴き声以外は、現代生活のにぎわいを見ることもできない。これは「世界の屋根」と呼ばれる青藏高原(青海・西藏高原)のごく普通の光景である。

青藏高原では、標高の低い谷地の農業可能な土地を除けば、あとは樹木も育たぬ標高四〇〇〇メートルを越す、乾燥、寒冷の荒地がどこでも広がっている。第四の極地とも呼ばれるこの土地が、地球上もっとも高地で営まれているチベット遊牧民の世界である。夏の三ヵ月ほどの間にわずかな牧草が一度に芽吹くほかは何も生まれない永久凍土の土地で、人々は、もとは高原の野生種であったウシ科のヤクを家畜化してこれに寄り添い、衣食住の大半を家畜によって生きている。

そもそも手に入れることのできる唯一の燃料といえば、ヤクの糞である。現在では道路も通じて多少の物質が流通するようになってはいるが、わずかな牧草に全面的に依存する人々の生活形態には変化は見られない。どのテントを訪ねても必ず仏壇が祀られてあって、人々は日々の祈りを欠かさない。誰もがこの人生は前世の行いの結果（因果）だと心から信じて疑わない。

標高の低い村落で、半農半牧に生きる村人たちの意識も遊牧民と大差ない。たしかに、この極限のもとで一〇〇〇年以上にわたって培われてきた、深い信仰を支えに心の平安を求めるといった価値観を大きく揺るがすような変化は、チベット人の心の中では起こってはいない。素朴で楽天的で、自分の置かれた運命に満足しきって、来世もまた人間に生まれ変わることだけを念じてゆうゆうと生活している。

近年青藏高原の各州政府が遊牧民の定住生活推進を強力に展開し始めた。定住推進運動の主たる理由は教育問題である。移動する家庭から学齢児童を預かる小・中学校は、現在も遊牧民子弟のためにつくられているが、遊牧民の家庭では子供もまた貴重な労働力であり、夏休みや冬休みのときだけ家族と暮らすというこの制度は、現実を受けいれられにくい。多くの遊牧民が家族の一員としての子供をともしにする場合が多いのである。また高齢者の問題もある。そして、テント生活が及ばず医療、衛生面からみた健康問題も含まれている。

この運動は家ぐるみ、家族ぐるみで遊牧生活を送る従来の慣習を廃止し、定住する家屋をもち、子供は地区の学校に通わせ、老人を家に残したうえで、拠点となる定住家屋を中心にした放牧を行うというものである。

だが、青海省果洛州の場合も、呼びかけに応じて定住した遊牧民は二一一六戸、全体の二〇％に過ぎない⁽⁴²⁾。他の州の場合も似たようなので、一度定住した家族が再び遊牧生活にもどる例もある。

(二)

青藏高原では地形・気候などの自然環境により、牧畜区、農業区、半農半牧区の区域を区画して、牧畜業を発展してきたのは、中国では最も早いものである。世界でも牧畜業の区域企画を行った範例とも言える。今でも、参考とする価値がある⁽⁴³⁾。これは、牧畜区、農業区、半農半牧区の生態平衡と生産発展を保証したことだけでなく、中国と世界の牧畜業の発展に対して大きな貢献をしたが、その意義が深遠だと思っている。

しかし、青藏高原は中国の奥地にある最も遅れた「僻地」、この地上に残された最後の「秘境」と目されていた。一部分の人にはこの極限の高地への偏見が多い。これまで「チベット」は後進性の代名詞であった。「文化的に遅れた、貧しい、閉鎖的な辺地」といったものであった。しかし、今なお世界の秘境であっても、決して文化的に遅れたところではなかった。

青藏高原のチベット族人口の大部分はヤクを主としての家畜飼養に従事し、社会存立がそれらの家畜、あるいはその生産物に完全に依存している。このような牧畜社会においては、生業全体の中での家畜飼養の比重は、ほかの農業、工業社会よりもはるかに大きい。もちろん、チベット

族が飼っている家畜の生産力は決して大きなものではないが、だからといって、彼らの牧畜文化が未開だとか後進的だとかとは必ずしも言えない。牧畜が人間社会に及ぼした影響は、今日以外と過小されている。それは、地球上の多くの国家が農耕を基礎とした人々の手にゆだねられていることと無関係ではあるまい。だが、牧畜のもたらしたものは、たんに家畜の乳や肉が私たちの食卓を豊かにしてくれるという即物的なレベルにとどまらず、観念的な思考の世界にまで及んでいるのである。キリスト教がヒツジ牧畜を、イスラム教がラクダ牧畜を、そしてまたチベットのラマ教がヤク牧畜を基盤に形成されてきたことを、思いのほか私たちは気づかないでいる。

牧畜はまた、文明の歴史的展開に大きくかかわってきた。旧大陸において、牧畜とまったく無縁に国家が存亡したケースはむしろ少ないであろう。私たちになじみ深い吐蕃王朝は、歴史的にけっして例外的現象ではなかったのである。当世に輝かしい名声のある吐蕃王国は、かつてそのチベット軍の威光をもって、アジアの中部と南部に衝撃を与えたことがある⁽⁴⁴⁾。当時のチベットは大唐帝国と延々一〇〇年近く戦いつづけてきた軍事大国であった⁽⁴⁵⁾。

(三)

チベットの文化は、歴史的にみれば、はるかに世界的な広がりをもってきた。チベット仏教(ラマ教)の広がりという一例見ても、そのことがうかがえる。チベット仏教の伝播した範囲は、チベット(西藏)を中心として、南はヒマラヤ山脈の南麗のネパール、ブータン、西はインド北部、東は中国の青海・甘肅・四川・雲南の各省、北はモンゴル、中国東北、旧ソ連のシベリア南部に及ぶ。チベット仏教はアジアでは普遍的な位置を占めると見ていいだろう。

最近、青藏高原の西部の一角に二千窟以上の規模をもつ遺跡が発見されたという報道は驚きをこえて秘境の真面目を実感した。千仏洞のイマージュを越える大規模石窟遺跡群——「皮央(ピヤン)・東嘎(トンガ)」地球上に最大の奇跡であった。この周辺一帯は、東西をつなぐシルクロードの重要な拠点だったのではないかと想像している。

(四)

青藏高原の遊牧は農耕とともに人類史上重要な生活類型のひとつだった。歴史上の一時期、破壊的軍事力を発揮して悪魔のようにおそれられたこともある。中央集権的統治組織にとっては、遊牧民は常にまつろわぬ民であった。近代国家はすべて遊牧民を定住化の対象としてしかみてこなかった面もある。しかし、そのままでは利用できなかった砂漠や山岳地帯、広大な草原や荒蕪地を、ヤクなどの群居性の有蹄類を媒介にすることによって人類の生活空間としておしひろげてきた功績を無視することはできない。青藏高原の遊牧生活のいとなみを人類の上に正しく位置づける必要がある。

その過酷な風土の土で暮らしているチベット族の人々は、相互扶助の精神に富み、たとえば一頭のヤクを解体した場合は、百キログラムほどの肉がとれるが、これは近隣にひとしく配分される。ヤクの毛でつくられたテントの地も、近隣所の女性たちが手助けして織り上げたもので、い

くつかもの布をテントに縫い合わせるときは、集落の女性が総出で一気におこなう。

チベット族の人々が日夜、ひたすら全身全霊を傾けてその現実を願っているのは、現世での物質的繁栄、つまり金銀財宝に取り囲まれた生活ではない。究極は来世での幸せだが、現世で求めているのも精神面の充実のように思える。これは「先進社会」の人々の「金もうけ本位」、「金がすべての世の中」と、まるで対照的な世界である。

青藏高原の遊牧生活の世界は外部の世界の眼とは裏腹に、牧畜民は誇り高く、実にゆうゆうと暮している。それは、日本の貴族的・武士的気質を想像させるほどである。過酷とも思える環境のなかで、ものおじせず、彼らにとって自由な独立世界を飽くことなく維持してきた牧畜民とは、いったいにどのような文化がささえられているのか、私たちにとってはまるで異質に見える。この牧畜民の世界をときほぐしていくのが、本文のねらいであった。

(五)

青藏高原に関する研究は従来、歴史・地理・宗教(ラマ教—チベット仏教)を重点としている。一般的に言えば、チベット文化史についての研究は、仏教方面は容易的に注意力を集中している。ある著作の中に、大体仏教伝入史一部はチベット文化史に代わることである。仏教はチベットの文学、芸術、学術思想に深遠的な影響を与えたことを決して否認しないが、つまるところは、仏教はチベット文化の全部内容を総括することができないと思っている。実際に「仏教のチベットの側面にはもう一つの遊牧民のチベットがある⁽⁴⁶⁾」とロシアの学者ローリック(Y. N. Roerich)が指摘した。アメリカのチベット学者エクワルー(R. B. Ekvall)は、もしヤクを投げ捨てればチベットの牧畜業は生存していくことが想像できないと述べた。青藏高原の代表的な動物、チベット族と切れ離すことのできないのは、長毛のヤクである。

青藏高原の特有の家畜であるヤクは、物資の運搬にはなくてはならない存在である。ヤクが「高原の舟」と呼ばれるゆえんである。また、ヤクの肉は一家の主食の一部となるほか、その乳はバターに加工され、チベット族には欠かせないバター茶の材料となる。さらにその毛は遊牧民の手で織られてテントの地となり、その皮は家族の衣服となる。その角は容器となる。その糞は、干されて暖房や炊事のための燃料に早変わりする。要するに、チベットの遊牧民の生活では、基本的な物質は自給自足するという一線が貫かれている。必要なものは自然から得る。そして、それらは有効に活用され、捨て去られるものは何一つとしてない。つまり、無駄のない生活である。換言すれば、チベット族の人々は実に合理的な生活をしている。

ヤクは青藏高原の風土に適応する独特の家畜である。ヤクは役畜をはじめ、肉・乳・皮・毛・絨(じゅう)・角・尾など多用の家畜として、当地牧民の物質文化の基本資源である衣・食・住・交通・運輸すべてを満たす。財として交換する。牧民の重要な財産である。ヤクは交通手段、食糧、皮革、毛、排泄物の利用といった使用価値ばかりではなく、精神やものの考え方などの世界にまでも、その影響はきわめて大きなものがある。青藏高原の遊牧民の世界を理解するために、青藏高原におけるヤクの牧畜文化に関する研究を深めなければならない。

注

- (1) 福井勝義「牧畜へのアプローチと課題」, 福井勝義・谷泰編著『牧畜文化の現像』, 日本放送出版協会, 一九八七年。
- (2) 野澤謙・西田隆雄『家畜と人間』, 出光書店, 一九八一年。
- (3) 中国牦牛学編写委員会編『中国牦牛学』, 四川科学技術出版社, 一九八七年。
- (4) 中国科学院自然地理編集委員会編, 朝日稔, 三浦慎悟・森美保子・権藤真禎訳『中国の動物地理』, 日中出版, 一九八一年。
- (5) 前掲書(3)。
- (6) 前掲書(3)。
- (7) 地図出版社編『中国自然地理図解』, 一九八四年。
- (8) 色川大吉編『チベット・曼荼羅の世界』, 小学館, 一九九四年。
- (9) 張治勲編著『中国自然地理図解』, 陝西師範大学出版社, 一九九〇年。
- (10) 周正著, 田村達弥訳『崑崙の秘境探検記』, 中央公論社, 一九八六年。
- (11) 前掲書(3)。
- (12) 色川大吉『雲表の国』, 小学館, 一九八八年。
- (13) 山口慧海『第二回チベット旅行記』, 講談社, 昭和五六年。
- (14) 佐藤長『チベット歴史地理研究』, 岩波書店, 一九七八年。
- (15) 前掲書(14)。
- (16) 楊明「試論藏族遊牧部落的牦牛図騰」—『西南民族学院学報』〈哲学版〉, 一九九〇年五月。
- (17) 谷泰「西南ユーラシアにおける放牧羊群の管理」—福井勝義・谷泰編著『牧畜文化の現像』, 日本放送出版協会, 一九八七年。
- (18) プルジワルスキー著・田村俊介訳『中央アジアの探検』, 白水社, 一九八二年。
- (19) 石毛直道・和仁皓明編著『乳利用の民族誌』, 中央法規, 一九九二年。
- (20) F. E. ゾイナー著, 国分直一・木村伸義訳『家畜の歴史』, 法政大学出版局, 一九八三年。
- (21) マルコ・ポーロ著, 愛宕松男訳注『東方見聞録』, 平凡社, 昭和五一年。
- (22) 山口慧海『チベット旅行記』, 白水社, 一九六七年。
- (23) 前掲書(18)。
- (24) 前掲書(18)。
- (25) 高山龍三『失われたチベット人の世界』, 日中出版, 一九九〇年。
- (26) 前掲書(18)。
- (27) 大泰司紀之「チベット族のヤク・ヒツジ牧業」畜産の研究第四卷第七号, 一九八八。
- (28) 前掲書(2)。
- (29) 前掲書(17)。

- (30) 前掲書(18)。
- (31) 青海省編輯組編『青海省藏族蒙古族社会歴史調査』, 青海省人民出版社, 一九八五年。
- (32) 君島久子『ケサル大王物語』筑摩書房, 一九八七年。
- (33) 『藏学研究論文』第四集, 中央民族学院藏学研究所編。
- (34) 薩迦・索南堅贊著, 陳慶英/仁慶扎西訳注『王統世系明鑑』, 療寧人民出版社, 一九八五年。
- (35) 佺錦華『藏族民間文学』・西藏人民出版社, 一九九一年。
- (36) 前掲書(8)。
- (37) 前掲書(12)。
- (38) 杉山二郎「壁画類に多様な宗教観」『朝日新聞』, 一九九四年一月十七日。
- (39) 「伝統と高度な文化融合」一『朝日新聞』, 一九九四年三月七日。
- (40) 中央美术学院・金維諾教授「生活様式知る重要資料」一『朝日新聞』, 一九九四年三月七日。
- (41) 福永光司・元東大教授, 元京大人文研究所長『馬の文化と船の文化』一『中日新聞』一九九四年十月九日, 十三版。
- (42) 井上靖『大黄河』の第一巻「遙かなる河源に立つ」, 日本放送出版協会, 一九八六年。
- (43) 前掲書(3)。
- (44) 童恩正「西藏考古総述」一『藏族史論文集』, 四川民族出版社, 一九八八年。
- (45) 山口瑞鳳『チベット』(上), 東京大学出版会, 一九八八年。
- (46) Roerich' Y. N.1961 : The Nomad Tribes of Tibet' The countries and Peoples of the East' Yu. V. Martin and B. A. Valskayaed. Translated from the Russian by I. A. Gavrilov and P. F. Kostyuk, Nauka Publishing House'Moscow'pp. 238~243.

参考文献

- (1) 家永泰光『草原文化の道』, 古今書院, 一九九四年。
- (2) 加茂義一『家畜文化史』, 法政大学, 一九七三年。
- (3) 松本栄一(極限の高地)『チベット世界』, 小学館, 一九八八年。
- (4) 護雅夫『遊牧騎馬民族国家』, 講談社, 一九九三年。
- (5) 張容昶『中国的牦牛』, 甘肅科学技術出版社, 一九八九年。
- (6) 西義之訳(西域探検紀行全集・第一一巻)『蒙古と青海』, 白水社, 一九六七年。
- (7) 赤烈曲扎『西藏風土志』, 西藏人民出版社, 一九八二年。
- (8) 丁世良・趙放主編『中国地方志民俗資料彙編』(西北編), 書目文献出版社, 一九八七年。
- (9) 丁世良・趙放主編『中国地方志民俗資料彙編』(西南編), 書目文献出版社, 一九八七年。
- (10) 中国科学院自然地理編集委員会編, 朝日稔・三浦慎悟・森美保子・権藤真禎訳『中国の動物地理』, 日中出版, 一九八一年。
- (11) 李安宅『藏族宗教史之实地研究』, 中国藏学出版社, 一九八九年。
- (12) 衛傑文・揚閔・陸旦中・王効乾・楊伯震編, 河野通博・青木千枝子訳『現代中国地誌』,

古今書院，一九八八年。

- (13) 野町和嘉『チベット』〔天の大地〕，集英社，一九九四年。
- (14) 鯉淵信一『騎馬民族の心』，日本放送出版協会，一九九二年。
- (15) 宮持優訳『ヒマラヤの小チベット＝ラダック』，未来社，一九八四年。
- (16) 松原正毅『遊牧の世界』(上，下)中央公論社，一九八三年。
- (17) 山口瑞鳳『チベット』(上，下)，東京大学出版会，一九八八年。
- (18) 『中国民族統計——一九九二』，中国統計出版社，一九九三年。
- (19) 祝卓主編『人口地理学』，中国人民大学出版社，一九九一年。
- (20) 阿部治平『中国地理の散歩』，日中出版，一九九七年。
- (21) 金子民雄『チベットの民話』，白水社，一九八〇年。
- (22) ハイソリヒ・ハラ著，福田宏年訳『チベットの七年』，白水社，一九八九年。
- (23) ペマ・ギャルポ『チベット入門』，日中出版，一九八七年。
- (24) 民族知識手冊編集組『民族知識手冊』民族出版社，一九八八年。
- (25) 王沂暖訳『格薩爾王傳』(降伏妖摩之部)，甘肅人民出版社，一九八〇年。
- (26) 青海人民出版社編集出版『青海』，一九八五年。
- (27) 許国英『青海藏族民間諺語選』，青海人民出版社，一九八七年。
- (28) 小貫雅男『遊牧社会の現代』，青木書店，一九八五年。
- (29) 大塚和義『草原と樹海の民』，新宿書房，一九八八年。
- (30) 河口慧海『チベット旅行記』(一～五卷)，講談社，昭和五四年。
- (31) 坪野和子『チベットで深呼吸』，凱風社，一九八九年。
- (32) 梅棹忠夫『狩獵と遊牧の世界』，講談社，一九九三年。
- (33) 学習研究社「民族探検の旅」，第四集，一九七七年。